

埋蔵文化財調査研究報告Ⅱ

下那珂貝塚
しもなか

1988.3

宮崎県総合博物館

埋蔵文化財調査研究報告Ⅱ

下那珂貝塚

1988.3

宮崎県総合博物館

はじめに

近年の宅地造成や農地基盤整備等の開発は、住民の生活環境の改善に欠くことのできない事業である反面、先人の残した貴重な文化遺産が絶えず消滅の危機に瀕しているのも忘れてはならない事実であります。こうした中で、埋蔵文化財への関心が高まり昭和57年10月2日に埋蔵文化財センターは県総合博物館の一部門として開設されました。

ここに報告する「下那珂貝塚」は県教育委員会によって発掘調査が行われましたが、諸般の事情で公表が遅れていたものです。埋蔵文化財センターでは事業の一つとしてこれらの出土品整理を精力的に進め、このたび「埋蔵文化財調査研究報告Ⅱ」として発刊の運びとなりました。

本書が学術資料および学校教育・社会教育資料として広く御活用いただくとともに、文化財保護の一層の理解と地域文化解明の一助となれば幸いです。

昭和63年3月

宮崎県総合博物館

館長 黒木 淳吉

下那珂貝塚

例　　言

1. 本書は、昭和42年3月2日から宮崎県教育委員会によって行われた下那珂貝塚の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査以来諸般の事情により報告が遅れていたが、昭和60年度から62年度にかけて埋蔵文化財センターの事業として整理を行い、その結果を報告するものである。
3. 整理には主事谷口武範（昭和60年～62年度）、整理専門員津隈久美子（昭和60～62年度）、整理作業員貴嶋活実（昭和60・61年度）、整理作業員戸高真知子（昭和62年度）があたった。
4. 遺物の実測は、土器は主に津隈・戸高が、石器、その他の遺物については谷口が行った。
5. 製図は津隈・谷口が行った。
6. 本書に掲載した写真的うち、遺構については博物館保管（栗原文蔵氏撮影）のものを使用した。遺物については谷口が担当した。
7. 本書の執筆・編集は谷口・津隈が行った。
8. 整理した遺物等の資料は台帳登録の上、埋蔵文化財センターおよび博物館で保管している。
9. 出出土器の「色調」については、「新版標準土色帖」を使用した。
10. 貝類の同定については、名古屋大学文学部助教授渡辺誠氏に御指導いただいた。
11. 本書に掲載した遺物の番号は、遺物台帳における遺物登録番号と一致する。

本文目次

I 調査の経緯	1
II 環境	1
III 遺構と遺物	4
1. 遺構	4
2. 遺物	5
IV 出土遺物の位置付け	10
V おわりに	21

挿図目次

第1図 遺跡位置図	2
第2図 新田原遺跡6号住居跡出土土器	27
第3図 中溝遺跡出土土器	28
第4図 堂地東遺跡S A 5出土土器	29
第5図 熊野原遺跡B地区出土土器	30
第6図 源藤遺跡出土土器	31
第7図 中岡遺跡出土土器	32
第8図 前原南遺跡・東平下2号周溝墓出土土器	33
第9図 上ノ原遺跡・浦田遺跡出土土器	34
第10図 熊野原遺跡C地区 S A 7出土土器	35
第11図 住居跡出土土器実測図(1)	36
第12図 住居跡出土土器実測図(2)	37
第13図 住居跡および溝出土土器実測図	38
第14図 土器実測図(1)	39
第15図 土器実測図(2)	40
第16図 土器実測図(3)	41

第17図 土器実測図 (4)	42
第18図 土器実測図 (5)	43
第19図 土器実測図 (6)	44
第20図 土器実測図 (7)	45
第21図 土器実測図 (8)	46
第22図 土器実測図 (9)	47
第23図 土器実測図 (10)	48
第24図 土器実測図 (11)	49
第25図 土器実測図 (12)	50
第26図 土器実測図 (13)	51
第27図 土器実測図 (14)	52
第28図 石器実測図	53
第29図 石器・鉄器実測図	54
第30図 石器実測図	55
第31図 石器・縄文土器実測図	56

目 次

第1表 下那珂貝塚出土貝類	9
第2表 下那珂貝塚出土土器編年表	25~26
第3表 弥生土器觀察表	57~70

図 版 目 次

図版1	上 遺跡遠景（昭和42年当時） 下 遺跡から東を望む（昭和42年当時）	71
図版2	上 遺跡近景 下 発掘風景	72
図版3	上 住居跡遺物出土状況 下 遺物出土状況	73
図版4	上 遺跡の遠景（南より） 下 遺跡の立地する丘陵（現在）	74
図版5	出土遺物（1）	75
図版6	出土遺物（2）	76
図版7	出土遺物（3）	77
図版8	出土遺物（4）	78
図版9	出土遺物（5）	79
図版10	出土遺物（6）	80
図版11	出土遺物（7）	81
図版12	出土遺物（8）	82
図版13	出土遺物（9）	83
図版14	出土遺物（10）	84
図版15	出土遺物（11）	85
図版16	出土遺物（12）	86
図版17	出土遺物（13）	87
図版18	出土遺物（14）	88
図版19	出土遺物（15）	89
図版20	出土遺物（16）	90
図版21	出土遺物（17）	91
図版22	出土遺物（18）	92
図版23	出土遺物（19）	93
図版24	出土遺物（20）	94

I 調査の経緯

昭和41年、下那珂貝塚は地元の高校生によって完形の壺形土器と滑石製鉗鍤車が発見されたことによりその存在が確認された。しかし、出土地点の下に県立総合農業試験場が建設され、それに伴い遺跡周辺も柵橋柵にするための造成が行われその所在が不明となった。そのため、県教育委員会では、石川恒太郎氏（当時・県文化財専門委員）、日高正晴氏（同）、栗原文蔵氏（当時・県立博物館学芸員）を調査員として発掘調査を実施している。調査は、昭和42年3月2日から行われ貝塚の一部、住居跡や多量の土器、石器などの遺物が発見された。

II 環 境

下那珂貝塚は宮崎郡佐土原町大字下那珂字城ヶ峯にある。

佐土原町は、北は新富町、西は西都市に隣接し、小河川によって複雑に入りくんで開析された50~100mの丘陵部と、その小河川が合流した石崎川と一級河川の一つ瀬川とによって形成された沖積平野部とで構成されている。

遺跡は、複雑に蛇行しながら東流する石崎川左岸の標高54mの丘陵上に位置している。本遺跡は佐土原町の南端にあたり、石崎川を挟んだ対岸は宮崎市になっている。

宮崎市から佐土原町、新富町にかけてそれぞれ大淀川、石崎川、一つ瀬川によって広大な沖積平野が形成され、弥生時代前期から数多くの遺跡が営まれている。周辺に弥生時代の遺跡を求めるに、まず、石崎川河口近くの砂丘上に立地する後期前半の中溝遺跡がある。⁽¹⁾昭和47年、一つ葉有料道路建設の際に調査されたもので、住居跡1軒、土塙1基を検出し「中溝式」と呼ばれる甕が出土している。⁽²⁾下那珂貝塚の対岸の標高約10mの砂丘に立地する西片瀬原からは丹塗の袋状口縁甕といわゆる「中溝式」の甕が発見された。⁽³⁾下那珂貝塚から南へ約2km程下った県立宮崎養護学校校庭の南裏にある保木下遺跡は、石崎川の支流新名爪川左岸に位置している。新名爪川の氾濫によってもたらされた弥生前期から終末期までの遺物が出土し、特に中期後半の遺物はこれまで空白期であった部分を埋めるものとして注目される。⁽⁴⁾また、石崎川河口の砂丘上からは叩きが施された畿内第V様式系の甕が出土している。⁽⁵⁾また、遺跡の詳細なことは不明だが石崎川上流に架かる岩瀬橋を約百m上った川底から貝塚が発見されている。⁽⁶⁾貝層はカキ・アカガイなどあり、円形の透かしのある高杯脚部や局部磨製石斧



第1図 遺跡位置図

などが出土している。さらに、砂丘を北に上ると新富町の今別府A遺跡があり、弥生前期の板付式壺が2個体出土している。⁽⁷⁾ 南に目を向ければ弥生時代前期から連続と続く穗遺跡や⁽⁸⁾ 弥生中期後半の石神遺跡、終末期の中無田遺跡などをみつけることができる。このように砂丘上は弥生時代前期から生活の営みの場となり現在に引き継がれている。下郡河貝塚を形成した集団はこうした砂丘上から移動した人々によって営まれたのであろう。

註 (1) 『佐土原町中溝遺跡調査報告書』宮崎県道路公社 1972

(2) 田中 茂「宮崎県出土の丹彩袋状口縁壺形土器について」『研究紀要No.3』

宮崎県総合博物館 1975

(3) 同 上

(4) 『保木下遺跡』宮崎県教育委員会 1966

(5) 『宮崎県総合博物館収蔵資料目録・考古歴史資料編』宮崎県総合博物館 1963

(6) 石川恒太郎『宮崎県の考古学』 1968

(7) 『新富町の埋蔵文化財－遺跡詳細分布調査報告書』新富町教育委員会 1982

(8) 森貞次郎「10 宮崎県穗遺跡」「日本農耕文化の生成」 1961

(9) 「石神遺跡」『宮崎市文化財調査報告書 第1集』宮崎市教育委員会 1973

(10) 野間重孝「中無田遺跡出土遺物」『宮崎考古5』 1979

III 遺構と遺物

1. 遺構

遺構については、残念なことに当時の図面の所在が不明なため石川・栗原両氏の発表された文献と博物館に保管されていた写真や遺物を参考に報告する。

遺構は貝塚、土塙1基、住居跡1軒が発見されている。

なお、土器のなかに「下那珂貝塚 溝」とネーミングされたものがあり、どの遺構を指しているのか、あるいは新たな遺構として存在するのかはっきりしない。しかし、土塙か、住居を切っている新しい溝のことだろうと考えられるが、文献に溝についての記載がないことや、「土塙」とネーミングされた土器がないことから後者の可能性が高い。

(1) 貝塚について

発掘調査によって発見された貝塚は、東西に1m、幅0.6m、厚さ0.23mを測り、その殆どが破壊され僅かに残っているだけであった。

貝類はシジミ類が最も多く次いでハマグリ、タニシなどが出土している。また、獣・魚骨等の動物遺存体についての記載はなく、博物館に収蔵されていた貝類洗浄の際にも発見できなかった。

(2) 住居跡について(図版3)

貝塚の南方、約100mの丘陵東縁にある。柵橋園の周囲に巡らされた溝の断面に見えていたもので、溝の内側部分つまり園内にある分だけの発掘が行われている。園外は竹やぶで調査は行われておらず、現在もそのまま保存されている可能性が大きい。

住居は東側が溝によって切られているが方形と考えられ、南北の長さは2.30m、検出面からの深さは0.30mを測る。柱穴は住居内では見つからず、住居外の北側で1個検出されている。

遺物は床面から比較的まとまった状態で出土している。ほぼ完形の壺形土器をはじめ壺形土器、高杯、鉢等の土器の他に、石皿、磨石、くぼみ石がみられる。

(3) 土塙について

貝層の下に検出され、東西の長さ10m、幅約2m、深さが北側で60cm、南側で40cmを測る。多量の土器とともに、磨製石鎌、軽石製浮子、磨石、石庖丁、打製石斧等が出土している

が、出土状態はよくわからない。

2. 遺物

出土した遺物のほとんどは弥生時代のもので、縄文土器や平安時代と思われる須恵器等も少量見られる。

弥生時代の遺物には、土器、石器、鉄器のほか貝塚から出土した自然遺物がある。

なお、土器については、あとに土器観察表を掲載しているので実測図とあわせて参照していただきたい。

(1) 住居跡出土の遺物（第11図～第13図32～48・第30図228・230）

住居内からは土器と石器が出土している。

土器は住居出土とネーミングされたものと一括資料とが何点も接合しており、一括資料の中にも住居跡出土のものが含まれている可能性がある。土器のほとんどは破片で、ほぼ完形に復元できたものは1、11の壺、24、25の壺、47の器台だけであった。

壺は1に代表されるような中型のものと11のような小型のものがある。そのほかに13の刻み目突帯を有する壺もある。壺は長胴で25のように胴部上半に記号文が施されるものがある。短頸壺や複合口縁壺なども出土している。高杯は杯部が屈曲部から大きく外反する口縁をもち、脚部は二段に円形の透かしをもつものが多い。器台は比較的大型で47は口縁端部に横描波状文が施されその上に浮文が貼り付けられている。その他に、鉢形土器や蓋形土器も出土している。器種は壺、壺、高杯、鉢、器台の順に多い。

石器には石皿、磨石、くぼみ石がある。228は表、裏面および両側面はそれぞれ面取りされ砥石として使用し、欠損後、石皿として再利用したと考えられる。砂岩製である。磨石は先端に敲打具としての使用痕がみられる。くぼみ石は住居の上層から出土している。

(2) 「下那珂 溝」ネーミングの土器（第13図49～52）

ほとんどが壺、壺の破片で実測できるものは少ない。52は壺の胴部片で外面に波状の線刻が施されている。

(3) 一括資料の土器（第14図～第27図）

図示した土器には土塙出土のものや表採資料が含まれているが、それらの分別は困難とな

っている。そのなかで「飛鳥」の絵画文が描かれた162の壺形土器、214の杓子形土器は表採資料である。

土器についてはあとの考察のところで述べるので、ここでは省略する。

(4) 石庖丁 (第28図)

石庖丁は全部で6本出土している。うち、5本が表採品で残る1本が発掘での出土品であるが、それがどれに該当するのかは不明である。

形態は孔をもつもの2、もたないもの4、あるいは抉りが施されるもの5、施されないものの1などに分類できる。

215は両端に抉りをもち、2個の孔が施される。孔は両面から穿孔される。背部は曲面を有し、刃部はやや外湾する。整形時の磨痕が部分的にみられる。長さ9.2cm、幅4.4cmを測る。

216は抉りをもたず背部は直線で平坦である。刃部は、左側が肩部から外湾刃をなし、片方は肩部から垂直に下り、中央は直線刃をなす。両面から穿孔された2個の孔をもつ。長さ8.8cm、幅3.7cmである。217は方形の石庖丁で両端に幅広くやや浅めの抉りをもつ。背部は丁寧に面取りされている。全体に整形時の磨痕が観察できる。長さ11.2cm、幅5.0cm。218は方形の石庖丁で両側に小さめの抉りを有す。背部は直線で、刃部はやや外湾刃をなす。全体に磨耗が激しいが抉り周辺に紐の擦痕らしきものがみられる。長さ7.3cm、幅5.2cmである。219は丸味をもった方形の石庖丁で両端に抉りが施される。背部には調整痕が残され、刃部は直線刃である。表面は剥離が激しいが部分的には磨きの痕を確認できる。長さ7.6cm、幅5.2cmを測る。220は長めの方形の石庖丁である。左側にはやや幅広で浅めの抉りが施されるが、右側は欠損している。全体に剥離がひどく調整痕や使用痕などは観察できない。現在長10cm、幅4.3cmを測る。

(5) 紗錠車 (第29図221)

円盤状をなし全面に磨痕がみられるが、部分的に剥離、欠損している。中央には径0.4cmの孔がある。穿孔は両側から行われている。径3.6cm、厚さ0.6cm、重さ14.2gを測る。滑石製である。

(6) 磨製石鎌 (第29図222・223)

222はやや大型の磨製石鎌である。先端部は欠損しているが二等辺三角形をなしていたと

考えられ、基部は内湾する。また、中央のしのぎの部分が両面とも凹んでいる。さらに、切断面が磨耗していることから欠損後も使用していた可能性がある。現存長3.2cm、幅2.5cm、厚さ0.3cm、重さ3.5gである。223は基部の両端が面取りされロケット形をなしている。長さ3.5cm、幅1.7cm、厚さ0.2cm、重さ2.5gである。

県内では中期後半を初現に、古墳時代初頭まで約15ヶ所の遺跡から出土している。

(7) 軽石製石器（第29図224～226）

224は細長い精円形をなすと思われ、表面はきれいに整形されている。残存部だけで考えても少なくとも2個以上の穿孔があったと考えられる。現存長4.0cm、幅2.8cm、厚さ2.2cm、重さ3.4gである。225は先端部が丸くなり、頸部にあたる場所に縛綿のためと思われる溝が多いり、表面中央は凹んでいる。長さ6.6cm、幅は4.4cm、厚さは最大で2.0cm、最小で1.3cmとなる。226は7.3cm×6.7cmの方形を呈す。全体がきれいに面取りされ、中央には径約2cmの孔が施されている。周囲は約4cmと厚く、孔の方に向かって次第に薄くなり2.8cmほどになる。重量は32.5gと比較的重い。これらは浮子と考えられるが、三つとも大きさ、形態に違いがみられ、網などにつける場所の違い、あるいは獲る魚によって使い分けられていたと考えられよう。

軽石製の浮子は中期前半の船遺跡や中期後半の石神遺跡から出土している。⁽²⁾ ⁽³⁾

(8) 砧 石（第29図227）

板状の形態をなし、裏面は砥石としての使用面が剥離し、上半分が欠損している。欠損部以外のすべての面において使用痕が観察される。特に、表面はかなり使い込まれ中央が凹んでいる。現存長10.6cm、幅5.1cm、厚さ0.8cmである。

なお、住居出土の砥石を石皿として再利用していた228を加えれば全部で2点となる。

(9) 石 盆（第30図228・229）

228は住居跡出土のもので前述したとおりである。229はやや小型の石皿の一部だと思われる。表面が使用によって凹んでいる。現存長5.6cm、幅5.5cm、厚さ2.1cmを測る。砂岩製である。

(10) 磨 石（第30図230、第31図232・233）

230は住居跡出土で前述したとおりである。232は上半が欠損している。薄手で厚さ3.6cmを測る。現存長12.4cm、幅9.4cmである。233は全体に後世の傷がみられる。長さ11.1cm、幅8.8cm、厚さ5.2cmである。

(ii) 石錘 (第31図234)

扁平で短軸の両端に打ち欠きの抉りを施す。長軸約8cm、短軸7.2cm、厚さ1.6cm、重さ15.8gを測る。

弥生時代の石錘は輕石製浮子と同様、船遺跡や石神遺跡から出土している。

(iii) 打製石斧 (第31図235～237)

3点出土している。

235は表にはほぼ全体に、裏面は中央部に自然面を残す。長さ12.2cm、幅4.8cm、厚さ2.3cmを測る。236はいわゆる扁平打製石斧の先端部と思われる。全体に磨耗が激しい。現存長5.8cm、幅4.1cm、厚さ0.9cmを測る。237は235と同様に片面に自然面を残し、もう片面は中央部に自然面がみられる。両側面上半に抉りが施されている。長さ11.7cm、幅4.3cm、厚さ2.1cmを測る。

貝塚に伴うかどうかは一括資料のなかに縄文土器も含まれていることから疑問がある。

(iv) 鉄鎌 (第29図228)

現存長6.1cmの有茎鉄鎌である。先端部はなめらかな柳葉形をなし基部には段を有す。弥生時代から古墳時代初頭にかけて有茎の鉄鎌が出土した遺跡には川南町の中ノ迫A遺跡や宮崎学園都市遺跡群の熊野原遺跡C地区、新富町の川床遺跡などがある。⁽⁴⁾また、無茎三角鎌は中期後半の石神遺跡を初現として約十箇所程度の遺跡からみつかっている。⁽⁵⁾⁽⁶⁾⁽⁷⁾

(v) 縄文土器 (第31図238)

外面は大きな精円押形文、内面には斜行の沈線が走る。手向山式土器と考えられる。

(vi) 動物骨存体 (図版24)

下那珂貝塚ではすでに工事でほとんど破壊されてしまったためか、獸骨や魚骨などの脊椎動物のものは出土していない。

貝の出土量は別表のごとくである。ヤマトシジミがほとんどだがハマグリなどもみられ、

海岸線がかなり近くまで来ていたことが窺える。

県内では熊野原遺跡B地区5号住居跡出土の壺形土器の中からスガイやヤマトシジミなど⁽⁸⁾が、前原北遺跡では38号土塙から出土した壺形土器にやはり貝類が詰まった状態で見つかっている。⁽⁹⁾

註 (1) 石川恒太郎・栗原文藏「宮崎市外佐土原町下那珂弥生遺跡」

『九州考古学33・34』九州考古学会 1968

石川恒太郎・栗原文藏「宮崎市外佐土原町下那珂弥生遺跡」

『考古学協会第33回総会研究発表要旨』 1968

石川恒太郎『宮崎県の考古学』 1968

(2) 「縄遺跡・藤掛遺跡」『新富町文化財調査報告書 第2集』新富町教育委員会

1982

(3) 「石神遺跡」『宮崎市文化財調査報告書 第1集』宮崎市教育委員会 1973

(4) 「中ノ道A遺跡」『宮崎県文化財調査報告書 第28集』宮崎県教育委員会 1985

(5) 「熊野原遺跡C地区的調査」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書 第2集』

宮崎県教育委員会 1985

(6) 「川床遺跡」『新富町文化財調査報告書 第3集』新富町教育委員会 1986

(7) (3)と同じ

(8) 「宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報(Ⅲ)」宮崎県教育委員会 1982

(9) 「前原北遺跡の調査」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書 第4集』

宮崎県教育委員会 1988

	A			B			C		
	#	?	最小個体数 (%)	#	?	最小個体数 (%)	#	?	最小個体数 (%)
腹足類 卷貝	フトウミニナ?		5 (4.4)			5 (0.7)			7 (4.4)
	カワニナ					2 (0.3)			
	マルタニシ		18 (15.8)			3 (0.4)			9 (6.0)
双殻類 (二枚貝)	マガキ			?	?	1 (0.1)	?	?	1 (0.6)
	ハマグリ	15	10 (13.6)	9	4	9 (1.3)			6 (3.9)
	ヤマトシジミ	71	76 (66.2)	659	647	659 (96.6)	124	128 (84.2)	128 (84.2)
	イソシジミ			3	—	3 (0.4)	1	1	1 (0.6)
	計		114			682			152

第1表 下那珂貝塚出土貝類

IV 出土土器の位置付け

(1) 土器の型式分類

発掘調査が古く土器の出土状況があまり明確でなく完形のものも少ない。また、住居出土とネーミングされた土器と一括出土の土器が比較的接合していることや、一括資料も多くその中には表記資料も含まれていると考えられる。そこで資料を一括して、壺形土器、壺形土器、高杯形土器、器台形土器、鉢形土器の順で型式分類を行う。

壺の分類

壺の場合、古い要素と新しい要素が複雑に混じりあっているため各部位ごとに分類しそれらを考慮して型式分類を行う。

1. 口縁

- a ……端部がシャープで若干はねあがるもの
- b ……やや丸味をおび端部が凹むもの
- c ……丸く仕上げられているもの
- d ……端部が直立しているもの

2. 頸部

- a ……明瞭な稜をもち「く字状」を呈す
- b ……丸味をもって「く字状」を呈す
- c ……口縁部が長くなり、なめらかに立ち上がる

3. 底部

- a ……平底（I類・外反する、II類・外反しない）
- b ……わずかにあげ底（I類・外反する、II類・外反しない）
- c ……あげ底で外方に引き伸ばされるもの

壺の型式分類

次に、これらの諸要素をあわせて分類を行ってみたい。

I類 (8・56・59・65)

口縁a類、頸部a類をもつ型である。胴径と口径がほぼ同じくらいで、胴部最大径は上半にある。底部は不明だがa類、b類がつくと思われる。

口縁部は横ナデ、体部は細かなハケ調整が施される。

II類

口縁b類、c類、頸部b類、底部b類、c類をもち、胴部の形態によりさらに三つに細分される。

口縁外面はハケ調整の後、横ナデ。ハケ目が確認できるものがある。胴部上半は斜行のハケ目、下半はハケ、ナデ調整がみられる。底部は指頭痕を残すものと、その後横ナデを施すものがある。

A：胴部最大径が上半にあり口径とほぼ同じくらい (2・49・62・68・81)

B：胴径が口径を上回り、最大径が中位より若干上にある (73・74)

III類 (68・70・80)

II類に類似するが、胴部中位から急にしまり底部にいたる。胴部下半にハケ目原体による削り状の調整がみられる。

IV類

口縁b類、c類、d類、頸部c類、底部c類をもち、頸部下に若干の肩部を有する。口縁部や体部の形態により三つに分けられる。

調整は、胴部下半でハケ、ハケ目原体による削り状の調整が施され、底部端の指押さえのあとを横ナデによって消しているものが多い。

A：口縁がやや長くなり、丸味をもって外反する。(3・9・55・79)

B：口縁がさらに長くなり外方に立ち上がる。そのため口径も大きくなる。

-(53・54・67・69・73・75・76)

V類 (64)

口縁d類、頸部c類、胴部はあまり張らずに底部にいたる。底部は中央部がややあげ底を

呈す。胴部下半はハケ目の後ナデ調整が施される。

VI類 (78)

口縁 b 類、頸部 c 類、胴部下半からしまり、底部は a・I 類。器高と口径がほぼ同じくらいである。

VII類 (63・85)

口縁 c 類だが先細りとなる。底部は b・II 類で指頭痕をのこす。器高に比べ胴径、口径が小さい。

VIII類 (87~90)

刻み目突帯を頸部下にもつもので、口縁 b 類、頸部 b 類。内面には明瞭な稜はもたない。

IX類 (13)

口縁は直口し端部とその直下に刻み目突帯を有す。外面はハケ目、内面はナデ調整が施される。

X類 (91)

口縁は直口し端部にやや厚みのある刻み目突帯がつく。

壺の型式分類

I類 (104~110)

短頸壺である。やや長めの口縁と短いものとがある。胴部の張りによって三つに分類できる。底部は不明だが平底あるいは高台状の平底をもつと思われる。

A : 胴部は球形をなし頸部がしまる (104)

B : 頸部があまりしまらない (106)

C : 胴部最大径が下半にある (113・114)

D : 最大径が中位にありやや瘤球状を呈す (115・116・118)

II類 (119・120)

しまりのある頸部に短い外反した口縁がつく。胴部は長胴で最大径は上半にある。底部は高台状の平底を呈す。

III類

長めの外反した口縁にあまり張りのない長胴の胴部が続く。底部はレンズ状化はじめている。

A : 頸部はしまりがあり、胴部最大径が上半にあるもの (122・123)

B : 頸部は丸くなり胴部も長胴化したもの (25・124・162・163)

IV類

大きく張った長胴に平底の底部がつく。一部にはレンズ状をなすものもある。

A : 厚手の口縁で直立気味立ち上がり端部近くで大きく外反する (127・128)

B : 大きく外反した口縁をもつもの (125)

C : 底部がレンズ状をなすもの (159・161)

V類 (129)

広口壺の頸部に一条の突帯がつく

VI類 (130~133)

口唇部が拡張され口縁端部が三角形をなすもの

VII類 (136)

口縁は直立し、頸部には三角突帯がつく。突帯直上に横描波状文が施される。

VIII類 (137~139・164・166)

長頸壺で底部は平底をなす

A : 胴部が球形に近いもの

B : 扁球に近いもの

II類

複合口縁壺である。拡張部のちがいによって三つに分けられる。

- A : 拡張部がやや内傾し先端が丸細りする。口縁は長く直立気味に外反し、頸部に三角突帶をもつ。胴部は球形をなす (140)
- B : 拡張部が内傾し、櫛指波状文が施される (142)
- C : 拡張部が直立し、端部は平坦面を呈す (27)

高杯の型式分類

完形品がないので杯部と脚部とにわけて考える。

杯 I類 (176)

杯部は浅く、屈曲部をもたない

杯 II類 (174・175)

杯部が浅く、口縁が短くのびる

杯 III類

杯部が深く直線的に伸び口縁は外反する。厚手である

- A : 口縁部が短いもの (172)
- B : 口縁部が長めのもの (173)

杯 IV類 (178)

薄手で丸味をもって屈曲する。口縁端部は外側に垂れている。

杯 V類 (31・171)

口縁が外側に大きく外反するもの

脚 I類 (37・38・184・187)

厚手で裾部があまり広がらず縱長のもの

脚Ⅱ類 (36・180・181・186)

比較的薄手でⅠ類よりは裾部が広がる

脚Ⅲ類 (182・183)

高さが10cm以下のもの

器台の型式分類

器台Ⅰ類 (47)

口縁部が大きく外反し裾部径を上回る。胴部はさほどくびれず直線的に上方へのびる。上半と下半に4つずつ円形の透かしをもつ

器台Ⅱ類 (193~195)

厚手で裾部があまり広がらない

器台Ⅲ類 (197)

小型のもの

器台Ⅳ類 (188~190)

口縁あるいは脚端部に凹線文が施されるもの

鉢の型式分類

鉢Ⅰ類 (46・200)

外傾した胴部から口縁が直立気味にのびるもの

鉢Ⅱ類 (43・201~203)

胴部が内湾しながら外方にのび、口縁部がく字状に外反する
底部は平底を呈す

鉢Ⅲ類

あげ底の底部をもつもの

A : 口縁がくの字状に外反するもの (204~206)

B : 素口縁のもの (207)

(2) 編年

I期

壺はくの字状を呈し、頸部に明瞭な稜をのこす。口縁端部も鋭く、上方に若干はねあがるものもある。胴径が最大径で口径とほぼ同じかやや上回る。底部は平底と思われる。調整は口縁が横ナデ、頸部は細かいハケ目が施される。壺は短く外反する単口縁壺と大きく外反する壺がある。単口縁壺は頸部がありしまらない。体部の調整は内外面ともハケ調整である。後者の壺は水平だった口縁がやや傾くものの、口縁端部にはまだふくらみをのこしている。口唇部に山形の刻みが入るものもある。胴部径が最大となり中位よりやや上にある。底部は平底で、ていねいなナデ調整のものやハケ目のものもある。胴部外面はハケ目で下半には磨きが施される。内面は上半が指オサエ、下半がハケ調整である。高杯は全体を把握できるものはないが、鋸先状口縁が退化したものと考えられる杯部がある。

壺Ⅰ類、壺Ⅰ-A類、Ⅳ-A類、高杯・杯部Ⅰ類がある。

II期

壺はくの字状口縁で頸部に丸味をもつようになる。底部は若干あげ底のものと、あげ底で外方につまみだされ脚状を呈するものがある。口縁外面は横ナデだが、それ以前のハケ目を確認できるものもある。調整は胴部上半はI期のものより粗いハケ目、下半はハケ目あるいはナデ調整である。底部には指頭痕をのこすものが多い。壺は単口縁壺、長胴壺、複合口縁壺などがある。単口縁壺はI期のものより口縁が長くなり頸部もしまる。調整は外面がハケ目、内面上半が指ナデ、下半がハケ調整である。長胴壺は口縁が後出のものよりシャープで、頸部のしまりもしっかりしている。胴部最大径は中位から上半にかけてにある。底部はレンズ状化しはじめた平底で、若干あげ底のものもみられる。外面胴部中位から下半にかけてヘラ磨きが施され、暗文を呈している。長頸壺は口縁が外傾し胴部は球形に近く、底部は平底をなす。複合口縁壺は拡張部が未発達で、内面はなめらかに立ち上がり縁をもたない。口縁は直立気味に外方にのび、頸部には三角突帯がつく。胴部は球形。外面上半はハケ目、中位

以下は長胴壺にみられたようなヘラ磨きが施される。高杯はⅠ期からの系譜のものはみられず、口縁が屈曲するものがあらわれる。屈曲部から口縁部までは短く外反する。杯部は浅い。鉢は口縁部がよわく外反し、平底がややあげ底となる。

壺Ⅱ類、VIII類、壺I-B・C類、III-A類、VII-A類、II-B類、高杯・杯部Ⅱ類、脚部Ⅲ類、鉢-I類などが含まれる。

Ⅲ期

壺はⅡ期からひきつづいて、頸部が丸味をもつものと口縁が長くなりなめらかに立ち上がるものがある。胴部はあまり張らず長胴化している。口径が最大径となる。底部はほとんどあげ底で外方につまみだされ脚状を呈す。小型の壺には一部平底がつくものがある。胴部下半にはハケ目原体による削りがみられ、底部は指頭痕を横ナデによって消しているものが多くなる。壺はⅡ期と同様の器種がみられる。単口縁壺は頸部がしまり最大径が胴部上半にある。調整は胴部外面はハケ目、下半に壺同様ハケ目原体による削り調整が施されるものもある。長胴壺はⅡ期のものより頸部にしまりがなくなり、胴部も長胴化してくる。口縁端部は丸味をおび、底部はさらにレンズ化がすすむ。調整はハケ目が主体となる。長頸壺は扁球化して頸部と胴部との境も不明瞭となる。指ナデが胴中位までおよぶ。その外に、広口で頸部に突帯をもつ壺もみられる。高杯は口縁部が強く外反するようになる。体部は直線的に外方にのびるものと若干内湾しながらのびるものがあり、前者のほうが杯部が深くなる。鉢は壺を小さくしたようなものや、直口する椀形のものが増える。

壺Ⅲ・IV類、壺Ⅱ類、III-B類、IV-B類、V類、VII-B類、II-B類、高杯・杯部Ⅲ-B類、V類、脚部I・II類が含まれよう。

IV類

IV期の壺はⅢ期までのものとは明らかに違いがみられ、間に1~2型式入るものと考えられる。口縁はややくの字状を呈しながら長くのびる。器形は長胴で細長くすっきりしている。底部は若干あげ底をなすが、Ⅲ期のものとは異なり、それは製作技法の違いによるものと考えられる。調整もていねいで胴部上半はハケ目、下半はナデである。壺-V類がこれにあたる。

(3) 時期とその問題点

宮崎の後期の始まりは、石川悦雄氏の編年によればIV a期に該当し新田原遺跡出土の土器をこれにあてている。錐先状口縁の壺や下城式の壺など古い要素がみられるものの、壺の口縁がし字状からくの字状へ移行する過渡期であること、外来系として瀬戸内地方の土器が伴うこと、さらには新田原遺跡6号住居跡が、以後、南九州で多くみられる花弁状住居の初現形態であることなどから後期初頭に比定している。I期の土器は新田原遺跡出土土器に後続するものと考えられる。このように、下那珂I期の土器を新田原遺跡出土土器（第2図）に統くものと考えた場合、石川氏によって後期前半（IV b期）に比定されている佐土原町の中溝遺跡出土土器（第3図）との関連が問題になってくる。中溝遺跡出土の壺はくの字化した口縁、頸部下に刻み目突帯、胴部はあまり張らず底部はあげ底である。この形態の壺は田中茂氏によって「中溝式」として設定されている。⁽⁴⁾しかし、壺や鉢など対応する器種について良好な資料にめぐまれていないことや、その出現の時期、系譜が不明でその位置付けは流動的である。時期については口縁がくの字化していることや底部があげ底に変化している点から後期まで下ると考えられる。また、この中溝タイプの壺は宮崎学園都市遺跡群の堂地東遺跡での後期前半の住居から多量に出土（第4図）し、中期後半の住居からは発見されていない。また、同じ宮崎学園都市遺跡群内の後期後半の遺跡からはこれに系譜を辿れる土器が出土していないことなどから、中溝タイプの壺は後期初頭から特に前半を中心に流行した土器で、それ以後急に消滅していくようである。下那珂貝塚は中溝遺跡に近接し同時期と考えた場合、中溝タイプの壺が伴わないとは考え難くやはり時期差として捉えられよう。そうしたとき、下那珂I期の土器は後期中葉として位置付けできる。

II期はI期からIII期への移行期の土器で、壺はくの字口縁が鋭さを失い、壺においては底部のレンズ状化、新しい型式の高杯の出現などあり、III期へと引き継がれていく。また、当期は畿内の影響として絵画文土器が現れる時期でもある。壺は単口縁壺、長胴壺、長頸壺、複合口縁壺など多様化し、各地に類似品や後出するものを求めることができる。源藤遺跡16号土塙出土の壺（第6図）や熊野原遺跡B地区5号住居跡出土の壺（第5図）⁽⁶⁾は、拡張部が伸びて内傾し横描波状文が施され口縁も強く外反することから、壺IX-A類に後続するもの⁽⁸⁾と考えられる。中岡遺跡では長胴壺、長頸壺などに類例がみられる（第7図）。高杯は熊野原遺跡B地区12号住居跡と14号住居跡出土のもの（第5図）を参考にすると、脚I類が杯III類に、脚II類が杯II類にそれぞれつながるのではないかと考えられる。熊野原遺跡のものは透かしが裾部近くまで下がっている点や口縁端部が丸味をおびていることなどから下那珂出

土の高杯より後出するものである。このように後期後半になると裾部が広がるが器高の高くないタイプと裾部があまり広がらないものの器高が高いタイプの二つの系統の高杯が存在している。前者は東九州や瀬戸内の影響のもとに成立したと考えられるが、後者については出現の時期や系譜についてはよくわからない。熊野原遺跡出土の壺にはⅢ期の特徴である調整がみられることから、杯部Ⅱ類、脚部Ⅲ類はⅡ期におくことができる。また、Ⅶ類において突帯をもつ壺は丸味のあるくの字口縁でⅡ期に比定される。突帯は三角のものや丸いものがあり、刻み目は左下がりにつけられる。刻みの工具は布をまきつけた棒状のもので、刻み目に布痕が観察できる。この種の工具による刻み目は堂地東遺跡の壺にもみることができる。このように、中溝タイプに系譜を辿れる壺は極少量ながらⅡ期の時期までみられる。

Ⅲ期の壺はⅡ期から緩慢ではあるが明確にその変化を追うことができる。九州全域でみられるように口縁が丸味をおびてなめらかに立ち上がり、胴部は長胴化する。調整はⅢ期においてハケ目原体による削りが現れ、一部壺にもそれがおよんでいる。同時期の宮崎学園都市遺跡群の壺にも同様な調整がみられ、この時期の特徴として捉えることができる。これは、⁽¹⁰⁾ 東九州の後期後半の壺にも施される手法に近く直接的に結びつくかどうかは不明だが、安国寺系の影響のもとに成立した壺や器台など県内に多数みられることからすれば何らかの関係があると考えられる。底部は外方へつまみ出された脚状のものでハケ目原体による削りとともにⅢ期の特徴であり、これらの特徴をもつ壺は在地的なもので一つの型式として設定できるのではないか。長胴壺はⅡ期、Ⅲ期そして終末期から古式土師器と考えられる東平下⁽¹¹⁾ 2号周溝墓出土のもの（第8図）へとスムーズに変遷を辿り、東九州との関係を考える上でも有効な資料となる。中間に位置する県北に良好な資料がないことから流動的であるが、Ⅱ期の長胴壺は大分の田頭遺跡B地点1号住居跡出土のものより後出で、松木遺跡34号住居跡⁽¹²⁾ のものよりは古いと考えられる。IV-B類の壺の系譜については不明な部分が多いが鹿児島⁽¹³⁾ との関係が想定できる。後続するものは浦田遺跡（第9図）や熊野原遺跡C地区から出土していく、口径が小さくなり底部も丸底化していく。⁽¹⁴⁾ 129は壺か壺か判断に苦しむが、次段階の熊野原遺跡B地区や浦田遺跡出土のものから壺に分類した。高杯は口縁部が強く外反し、Ⅱ期の杯Ⅱ類に後続するものである。さらにこの系譜のものは屈曲部が不明瞭となり口縁部が外方にのび口径が広がる。Ⅲ期の時期を考えるまえに終末期の土器についてふれてみたい。終末期として考えられる土器をどれにあてるかによって下那珂のⅠ期からⅢ期までの時期に変動を及ぼすことになる。終末期の土器群の設定には、何をもって古式土師器とするのかというそれぞれ各人がもっている歴史観によって微妙に変化する。宮崎県内では集落の調査は

かなりの数にのぼっているものの沖積地の調査はほとんど行われていないこと、さらには弥生時代の墓地の調査は大荻遺跡と川床遺跡の二例にすぎず、社会の動向や外来系土器の搬入状況など不明な点が多い。このため確定はできないが土器の型式変化を優先させた場合、宮崎学園都市遺跡群において熊野原遺跡B地区や前原南遺跡出土（第8図）の在地的な壺、壺、高杯などの遺物と熊野原遺跡C地区出土（第10図）のそれらとの間に大きな変化を指摘できる。前者は壺は下那珂Ⅲ期の特徴をもち、壺や高杯、器台など大型化しバラエティーに富んでいる。これに対し後者は壺は口縁が長くなり底部も平底に変化する。壺には小型丸底壺がみられ、器台や高杯も小型化し、何れも器種ごとに大きさが統一されている。ここに弥生土器と古式土師器との一線を引くことが可能である。このような概念に立つならば、熊野原遺跡B地区出土の土器にやや先行する下那珂Ⅲ・Ⅳ期の土器群は後期後半に比定でき、Ⅱ期を後半の古階段、Ⅲ期を後半の新段階として位置付けられる。Ⅳ期の壺はⅢ期のものより1～2型式あいだに挟んで成立するもので、調整や底部の形態などは熊野原遺跡C地区のものに近く終末でも古式土師器に移行する直前の土器と考えられる。壺-Ⅵ類に分類した130～133は畿内第V様式の影響を受けていると思われとりあえずⅣ期においては、時期的には若干上るかもしれない。また、凹線文が施された188～190の土器は、小片のため壺か器台か判断できなかった。終末期に位置付け出来ると思われるが、今後資料の増加を待って検討したい。

今まで、同じ宮崎平野部として宮崎市周辺の中岡遺跡や源藤遺跡、宮崎学園都市遺跡群を参考に下那珂貝塚出土土器の時期を考えてきたが、そのなかでも地域差が認められ下那珂貝塚出土の土器群とは様相を異にしている。中岡遺跡では北・東九州をはじめとして瀬戸内系として凹線文土器が、畿内系として縦画文・記号文が出土し、さらに球磨地方のいわゆる「免田式」長頸壺も発見され複雑な様相を呈している。源藤遺跡では高い脚台状の底部をもつ壺が出土し、南九州の成川式や熊本の終末期にみられる壺に類似している。このように、各遺跡で外来系文化の影響を受けて作られた土器が出土していることから、まず遺跡内の詳細な分析はもとより、水系や小地域での検討が今後の課題である。

(4) 土器の成形について

土器整理の時に気づいた土器製作に関して若干触れてみたい。

單口縁壺の場合、120を参考にしてみてみると、まずドーナツ状の粘土紐を土台にして体部を作りあげていく。粘土紐の幅は3cm程度で、胴部最大径付近までは比較的速い時期で作られる。この時点で内外面にハケ調整が施される。その後、底部に粘土が充填されるが、多

量の粘土を詰めたらしく壺にみられるようなあげ底ではなく高台状の平底をなす。さらに、頸部あるいは口縁部になる部分までをやはり3cm程度の粘土紐で作り上げ、指やしづりによってしまいのある頸部に仕上げられる。そして、外面に下半部とはちがう方向のハケ調整が行われる。このような手法で作られているものには105、115、116、118～120、127などがあげられる。高台状底部を呈する土器の中には120と同じようにドーナツ状の粘土紐を使って作られたものもあるようだ。高杯の杯部と脚部との成形は、柱状の脚部を杯部の底に差し込むものがほとんどで武末純一氏のA II a類にあたる。²² 181は脚部上面が剥離している。これは脚部上面を充填していた粘土板が剥離したものと考えられ、武末氏のA II b類、あるいはB類にあてはまる。このように下那珂では脚部を差し込む技法が主体をなす。下那珂より後出の熊野原遺跡B地区や前原南遺跡では脚部上面に粘土を充填した高杯もいくつかみられるようになる。また、I期の176は中岡遺跡出土のものを参考にすれば杯部を脚部の上につけた形態のものであろう。壺は底部の断面からすると壺と同じようにドーナツ状の粘土紐から作り上げられている。しかし、どの段階であげ底の底部を成形するのか不明な点が多い。ドーナツ状の粘土紐の接合面が他の粘土紐に比べはっきり観察できることや、その部分が剥離しているものも多いこと。さらに、あげ底の底部が上部を支えるだけの太さではないことから、全体を調整し作り上げた後、土器を横あるいは倒置しドーナツ状の粘土紐を貼り付けてあげ底の底部を作りあげたと考えられる。古墳時代初頭の熊野原遺跡C地区出土の壺の底部はあげ底のものから平底に変化するが、厚手の丸底やドーナツ状の粘土紐から巻き上げて胴部を作った後、底部に粘土を充填したあげ底の底部も一部みられる。終末期から古墳時代初頭にかけては壺に多くみられるタキキ法は石崎川河口から出土した畿内第V様式系の土器²³²⁴ をはじめとして周辺の保木下遺跡や園田遺跡から多量出土しているが、川南町上ノ原遺跡（第9図）や宮崎学園都市遺跡群からは1～2点と非常に少なく、主体はやはりハケ調整で地域性が認められる。

V おわりに

下那珂貝塚は出土した資料から弥生時代後期後半を中心に形成された貝塚である。しかし遺跡のほとんどは造成によって破壊されてしまい、全貌を把握することは出来ない。

貝塚を形成したとはいへやはり「貝」は主食ではなく、石庖丁が示すように粗作あるいは

畑作を営んでいたと考えられる。しかし、現在の石崎川の蛇行の様子から弥生時代の人々は、川の氾濫や洪水に苦しめられたことであろう。そうした理由から生産性も低く年間通しての食料の確保が困難であったために貝を採集していたと思われる。弥生時代の貝塚は九州でも比較的多く、県内では串間市の本西方貝塚、延岡市の高野貝塚、宮崎市の住吉石崎川上流貝塚、下那珂貝塚の四箇所確認されている。²⁹

下那珂貝塚から出土した遺物は、後期初頭に瀬戸内系の影響がみられた次の段階で、絵画文など畿内の影響をうけている。これ以後、記号文や叩き技法、そして周溝墓と明瞭な姿で畿内系文化が現れる。このように下那珂貝塚が形成されたのは、畿内文化との長い交流の始まった時代である。³⁰

下那珂貝塚を整理するにあたり栗原文藏氏、石川悦雄氏には御指導御協力いただいた。記して感謝申し上げます。

註 (1) 『宮崎県総合博物館収蔵資料目録・考古・歴史資料編』宮崎県総合博物館

1983

中山悦雄「宮崎平野における弥生土器編年試案」『研究紀要No.8』 1982

石川悦雄「宮崎平野における弥生土器編年試案一素描 (M.k. II)」

『宮崎考古9』宮崎考古学会 1984

(2) 「新田原遺跡・瀬戸口遺跡・藪園地下式横穴墓」

『新富町文化財調査報告書 第4集』新富町教育委員会 1986

(3) 『佐土原町中溝遺跡調査報告書』宮崎県道路公社 1972

(4) 田中 茂「宮崎県出土の丹彩菱状口縁壺形土器について」『研究紀要No.3』

宮崎県総合博物館 1975

(5) 「堂地東遺跡の調査」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書 第2集』

宮崎県教育委員会 1986

(6) 「源藤遺跡」『宮崎市文化財調査報告書』宮崎市教育委員会 1987

(7) 『宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報 (III)』宮崎県教育委員会 1982

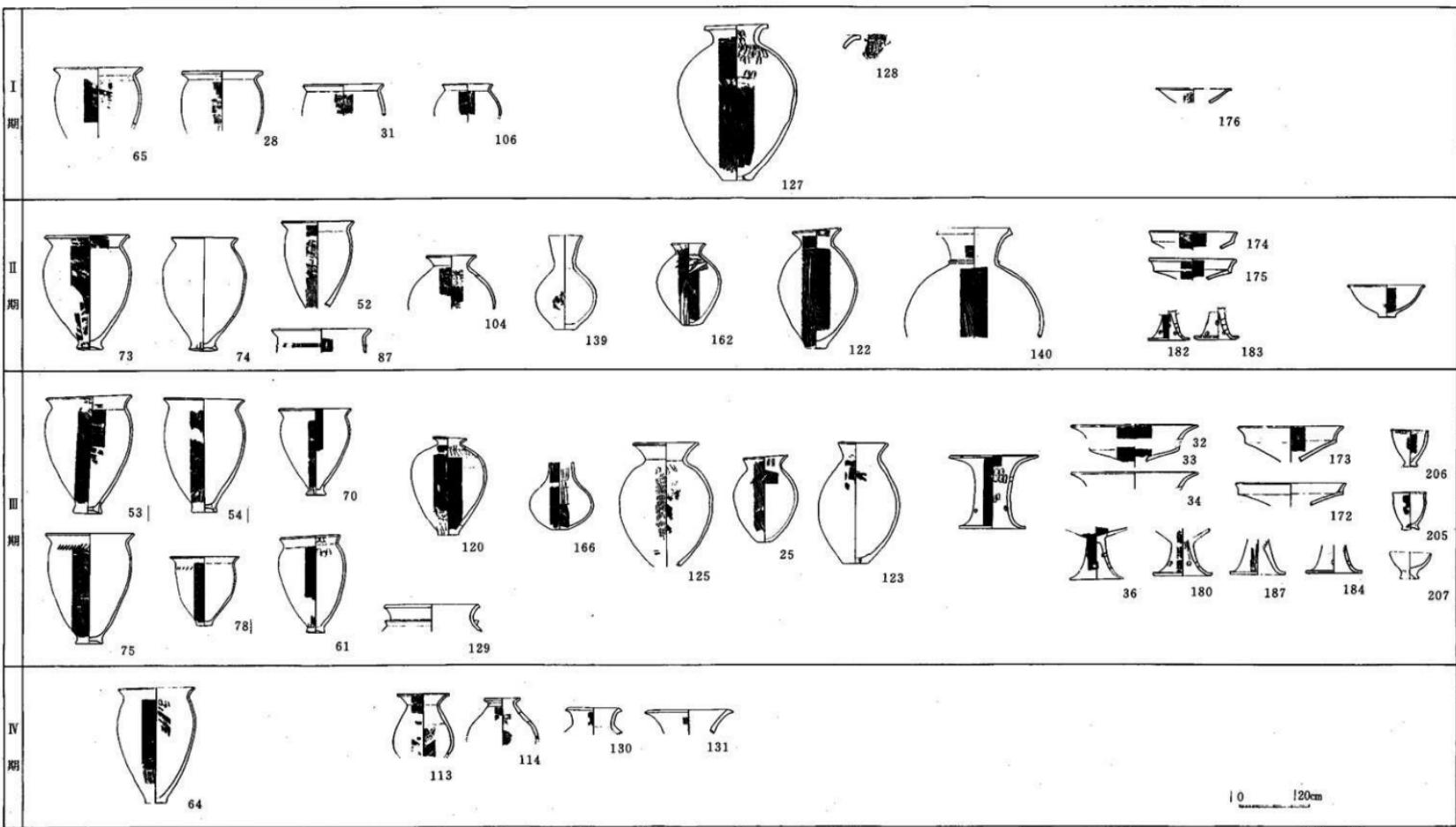
(8) 「中岡遺跡」『宮崎市文化財調査報告書』宮崎市教育委員会 1987

(9) 『宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報 (IV)』宮崎県教育委員会 1983

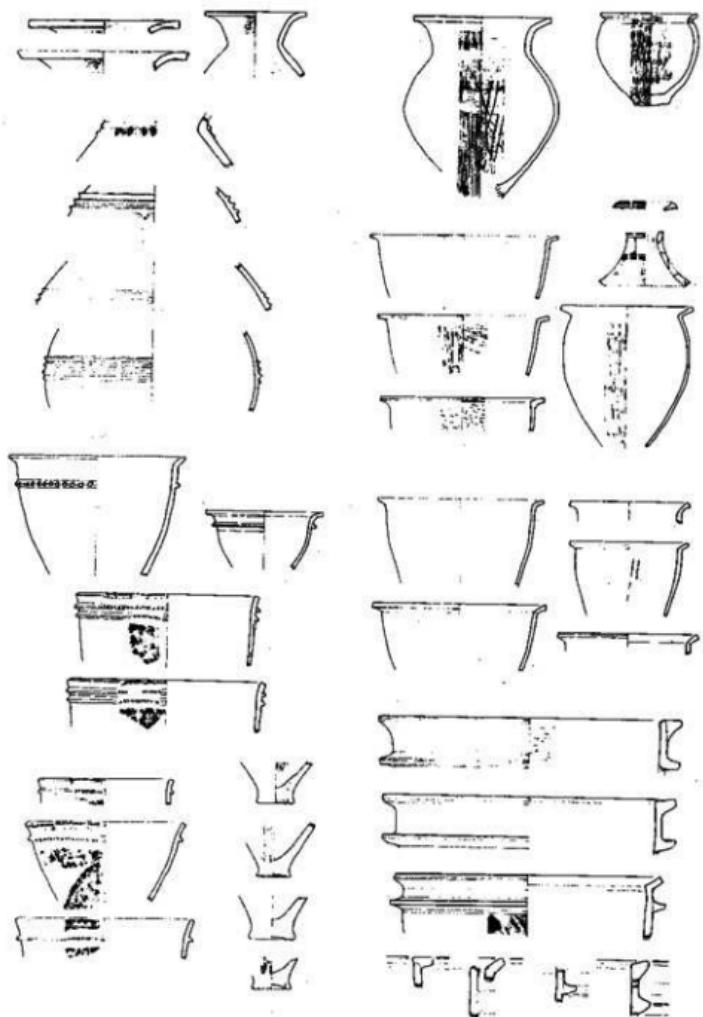
- (10) 高橋 徹「発見された鏡片」『古文化談叢 第6集』古文化研究会 1979
『大野原の遺跡』大野町教育委員会 1980
- (11) 「東平下周溝墓群一二号方形周溝墓—」『川南町文化財調査報告書』
川南町教育委員会 1982
- (12) 高橋 徹「発見された鏡片」『古文化談叢 第6集』古文化研究会 1979
- (13) 「松木遺跡の調査」『大野原の遺跡』大野町教育委員会 1980
- (14) 「浦田遺跡の調査」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書 第2集』
宮崎県教育委員会 1986
- (15) 「熊野原遺跡C区の調査」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書 第2集』
宮崎県教育委員会 1986
- (16) 「大萩遺跡(1)」宮崎県教育委員会 1974
- (17) 「川床遺跡」『新富町文化財調査報告書 第3集』新富町教育委員会 1986
- (18) 註(7), (9)
- (19) 註(7), (9)
- (20) 註(8)
- (21) 註(6)
- (22) 武末純一「須恵式土器」『赤生文化の研究 4』 1987
- (23) 註(9)
- (24) 都出比呂志氏の「底部輪台技法」にあたると思われる。
- 都出比呂志「古墳出現前夜の集団関係」『考古学研究 第20巻 第4号』1974
- (25) 註(1)
- (26) 「保木下遺跡」宮崎県教育委員会 1986
- (27) 昭和61年度に宮崎県教育委員会によって調査されている。
- (28) 「上ノ原遺跡」『川南町文化財調査報告書 第4集』川南町教育委員会 1986
- (29) 石川恒太郎『宮崎県の考古学』 1968
- (30) 石川悦雄「日向における外葉系の土器の伝播とその地域性—瀬戸内・畿内系土器の流入とその展開」『研究紀要No.9』 宮崎県総合博物館 1983

<参考文献>

- 小田富士雄「入門講座 弥生土器・九州」『考古学ジャーナル』第76~84号
1972~1973
- 小田富士雄・真野和夫「東九州」「三世紀の考古学 下巻」 1963
- 片岡宏二編「三沢栗原遺跡III・IV」「小都市文化財調査報告書 第23集」
小都市教育委員会 1985
- 金子浩昌「弥生時代の貝塚と動物遺存体」「三世紀の考古学 上巻」 1980
- 木村幾多郎「北部九州の弥生時代貝塚」「古文化論集 上巻」
- 森貞次郎博士古稀記念論文集 刊行会 1982
- 高橋 譲「入門講座 弥生土器・山陽」「考古学ジャーナル 173~181」
1980~1981
- 武末純一「北九州における弥生時代の複合口縁壺」「古文化論集 下巻」
森貞次郎博士古稀記念論文集 刊行会 1982
- 玉永光洋「東九州における弥生式土器研究1」「古文化論叢 第5集」
古文化研究会 1978
- 玉永光洋「豊後内陸部の土器」「弥生文化の研究 4」 1987
- 都出比呂志「畿内第五様式における土器の変革」
『小林行雄博士古稀記念論文集考古学論考』 1982
- 野間道孝・伊東 但「宮崎の古墳文化出現前夜」「えとのす 31」 1986
- 森 貞次郎「東九州地方」「弥生土器集成本編 1」東京堂 1964
- 森 貞次郎「弥生文化の発展と地域性—九州—」「日本の考古学 Ⅲ」 1968
- 柳田康雄「三・四世紀の土器と鏡」「古文化論集 下巻」
森貞次郎博士古稀記念論文集 刊行会 1982
- 柳田康雄「高三脚式と西新町式土器」「弥生文化の研究 4」 1987

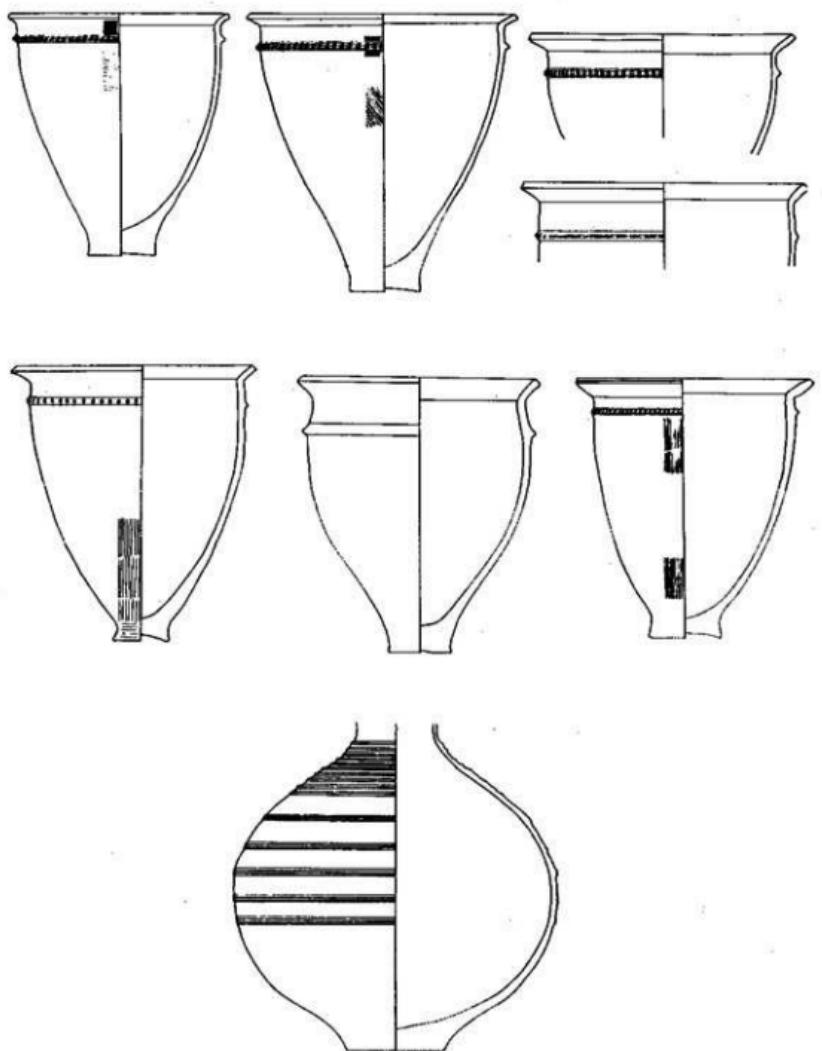


第2表 下鄭河貝塚出土土器編年表



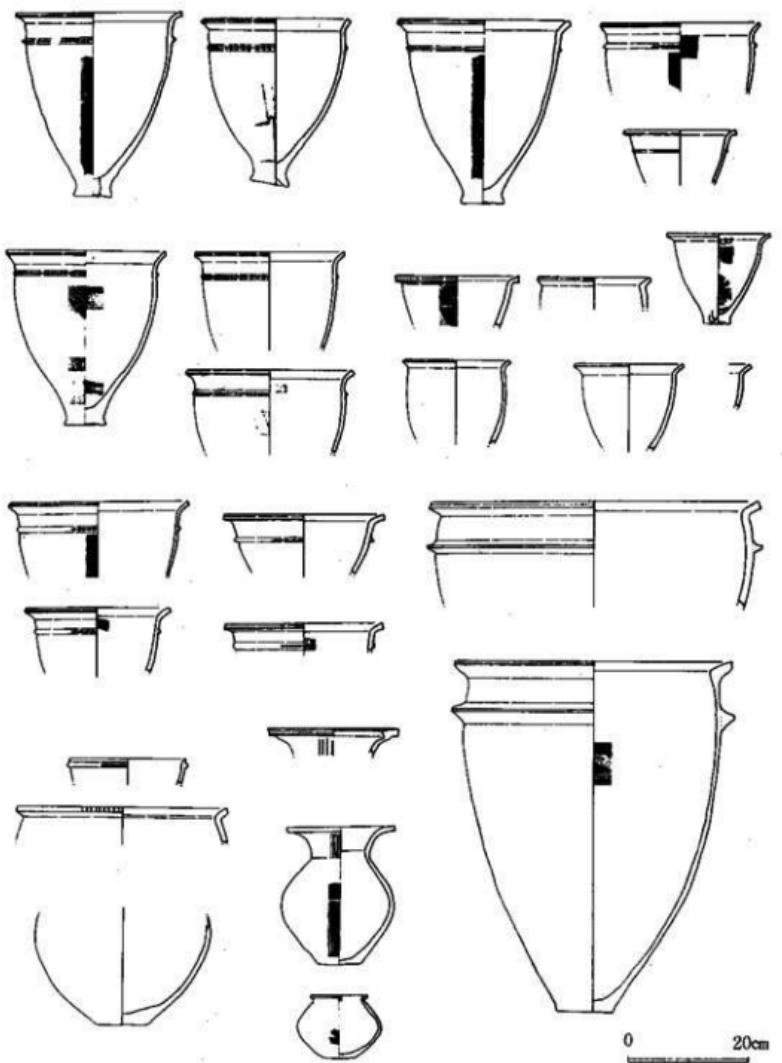
第2図 新田原遺跡 6号住居跡出土土器

註(2) 文献より



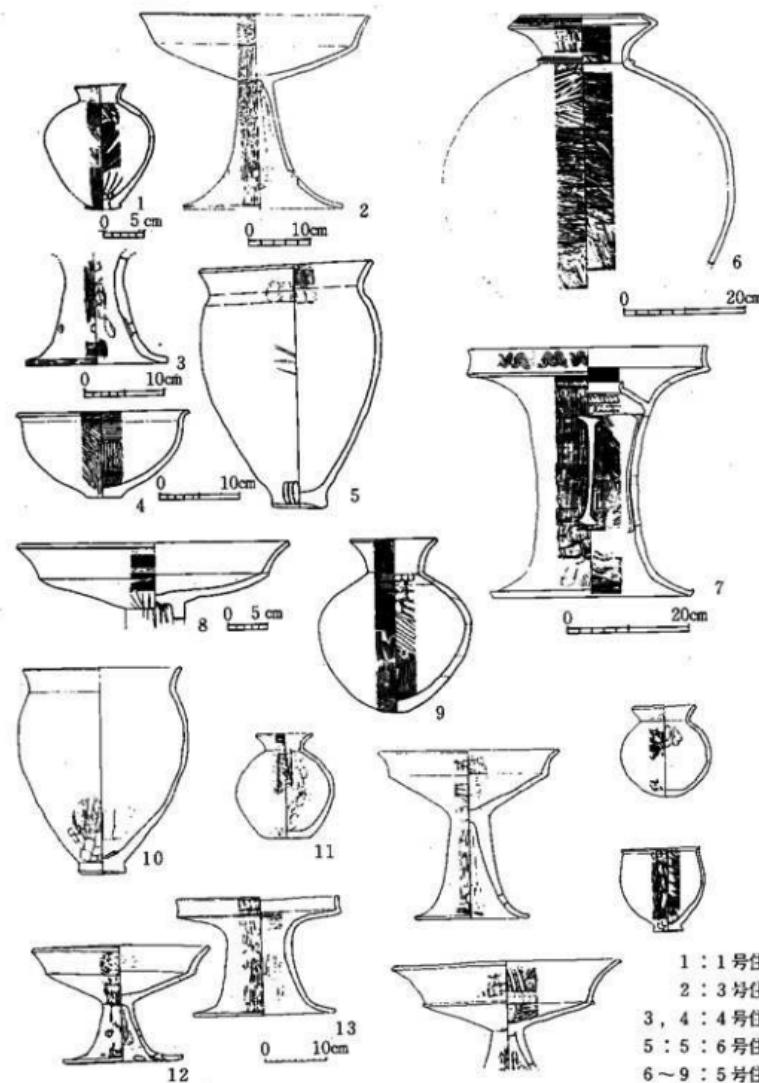
第3図 中溝遺跡出土土器

註(3),(4)文献より



第4図 堂地東遺跡 S A 5 出土土器

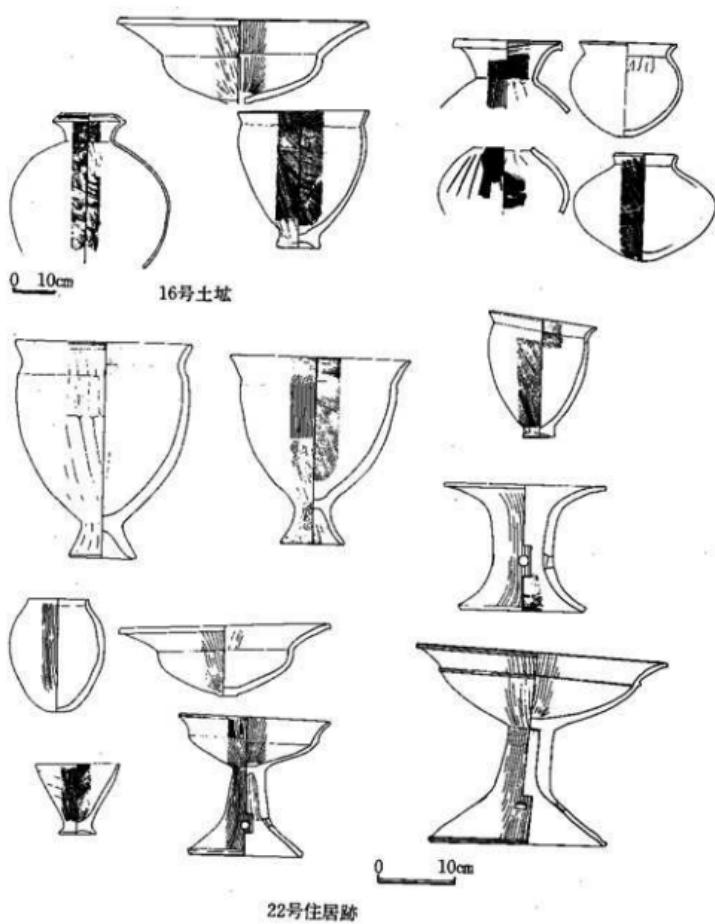
註(5)文献より



第5図 熊野原遺跡B地区出土土器

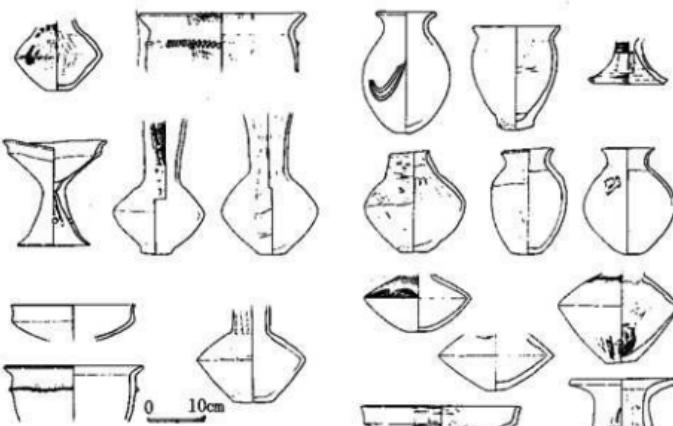
註(7),(9)文献より

- 1 : 1号住居
- 2 : 3号住居
- 3, 4 : 4号住居
- 5 : 5 : 6号住居
- 6~9 : 5号住居
- 10~13 : 12号住居

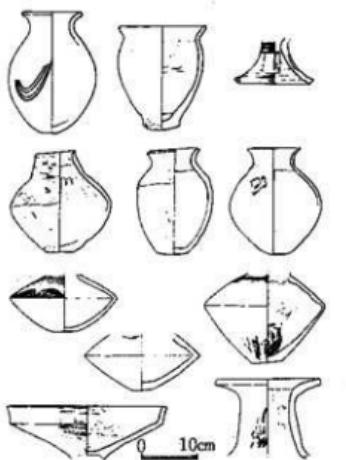


第6図 源藤遺跡出土土器

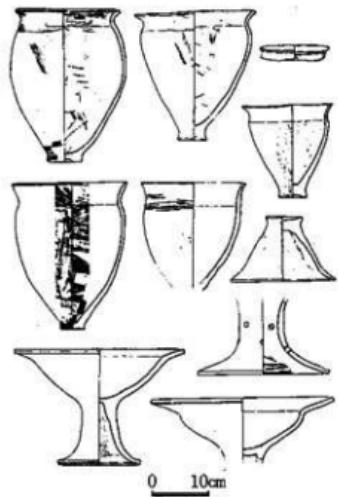
註(6)文献より



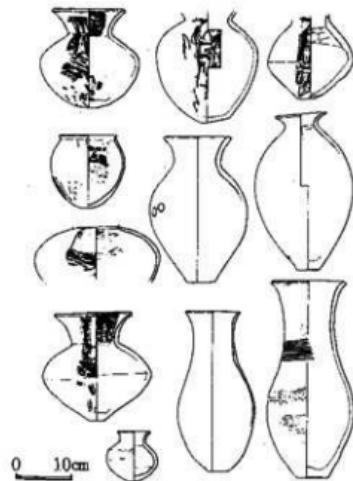
E-11・E-12・E-13・F-11区
出土土器実測図



C-11・D-12・D-13区 出土土器実測図



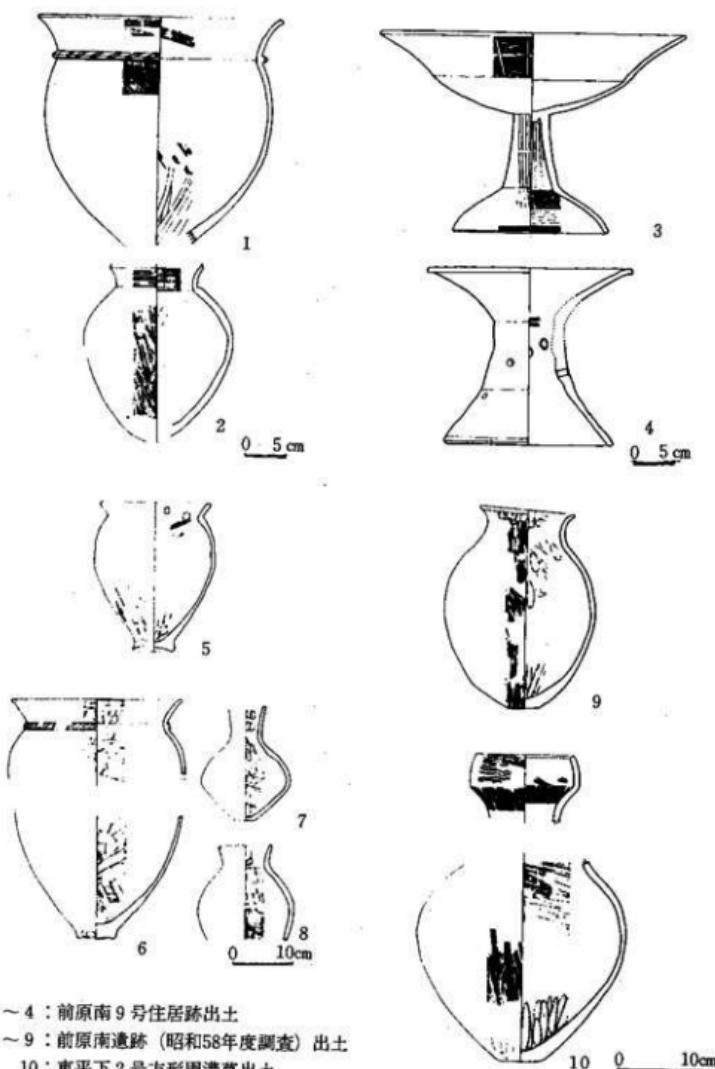
C-7区 出土土器実測図



D-8・D-9区 出土土器実測図

第7図 中岡遺跡出土土器

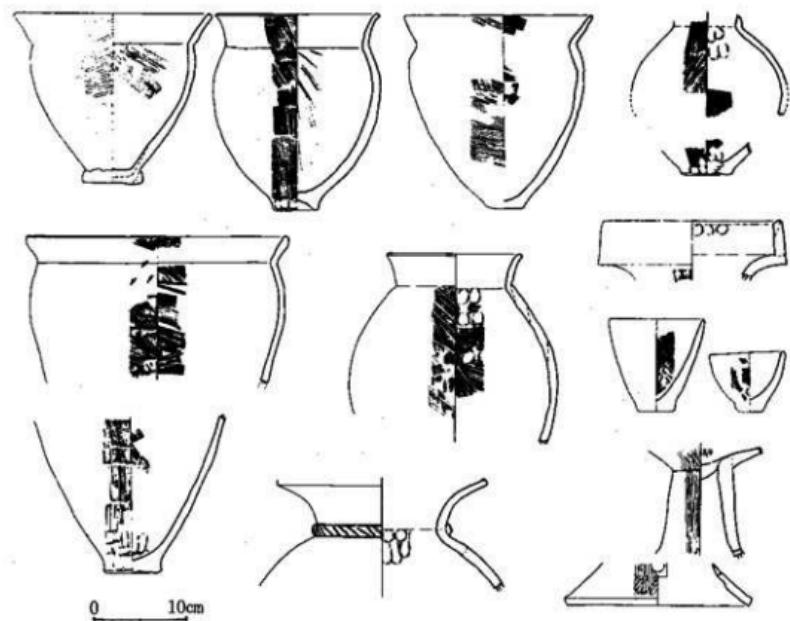
註(8)文献より



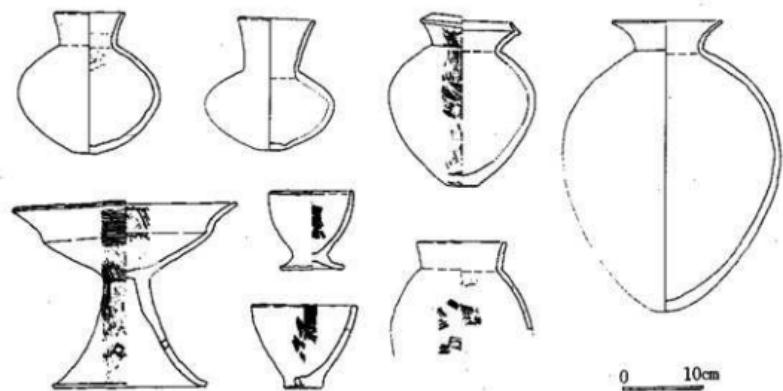
1～4：前原南9号住居跡出土
5～9：前原南遺跡（昭和58年度調査）出土
9, 10：東平下2号方形周溝墓出土

第8図 前原南遺跡・東平下2号周溝墓出土土器

註(7)、(9)、(10)より



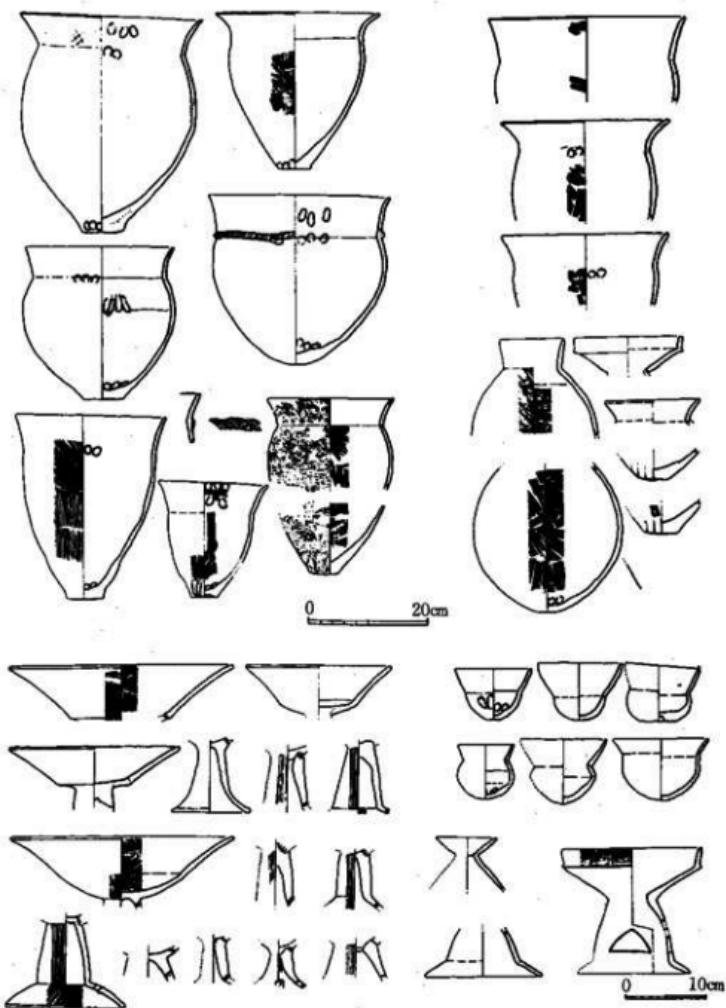
上ノ原遺跡 2号住居跡出土土器



浦田遺跡 S.A. 7 出土土器

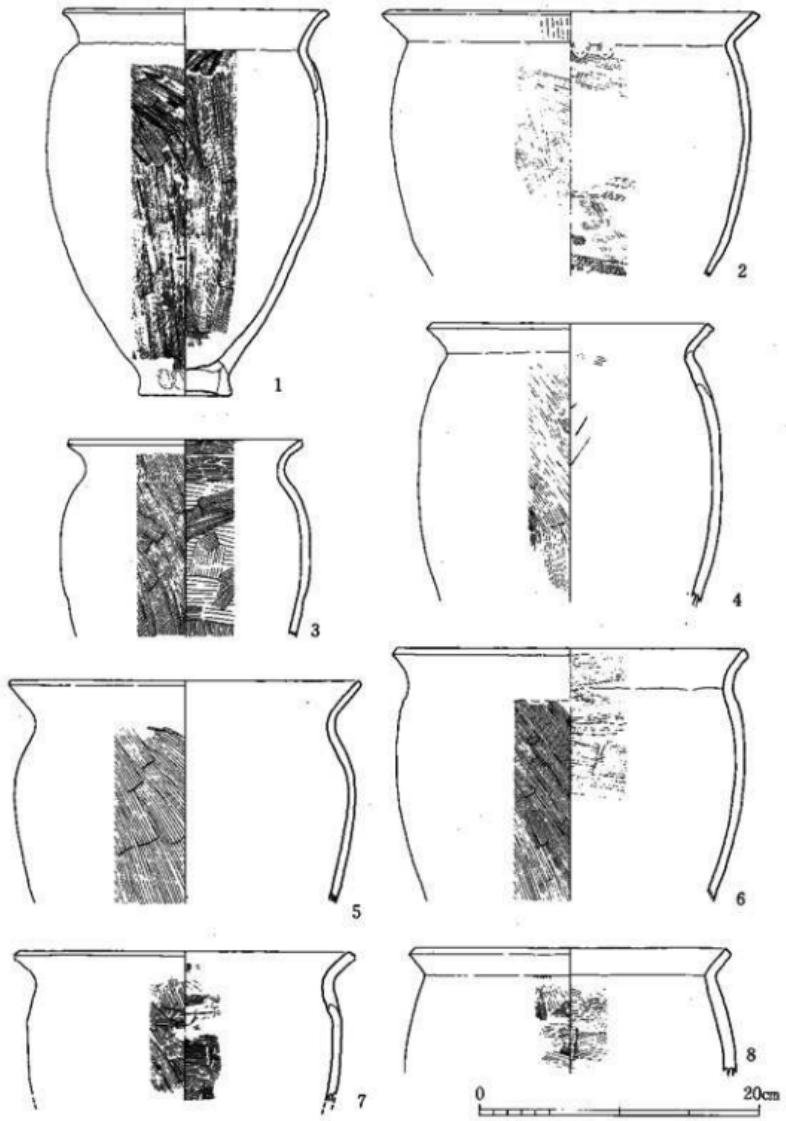
第9図 上ノ原遺跡・浦田遺跡出土土器

註04、08 文献より

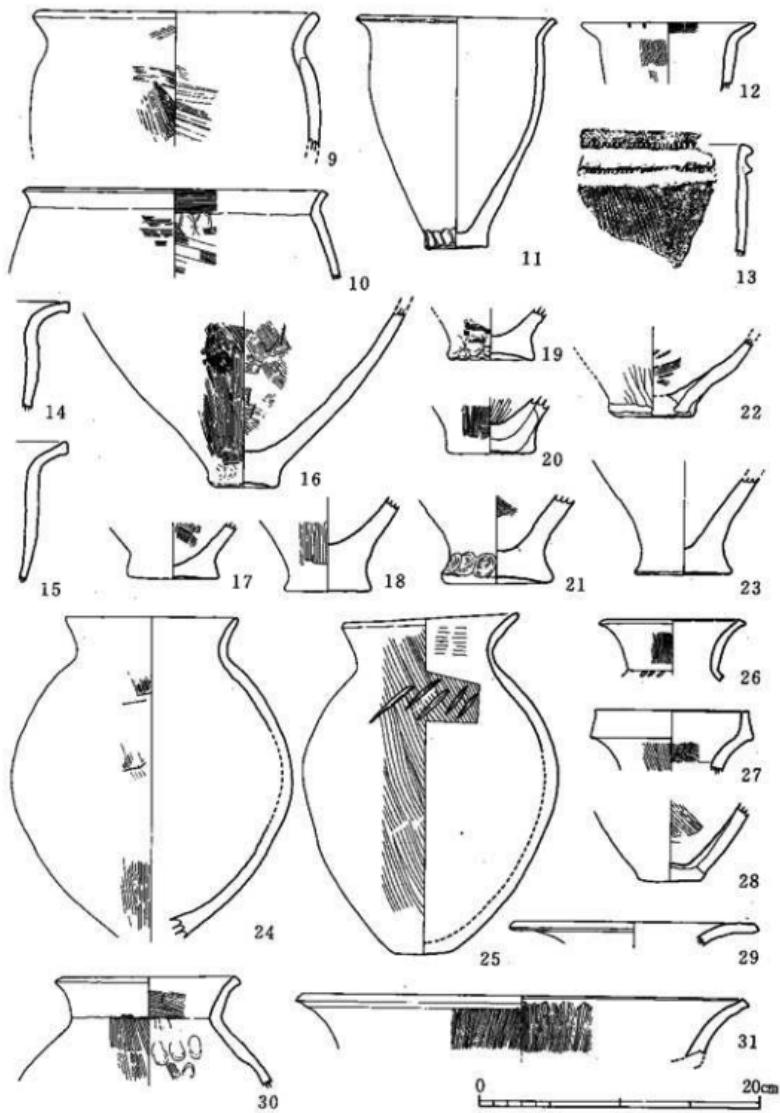


第10図 熊野原遺跡C地区SA7出土土器

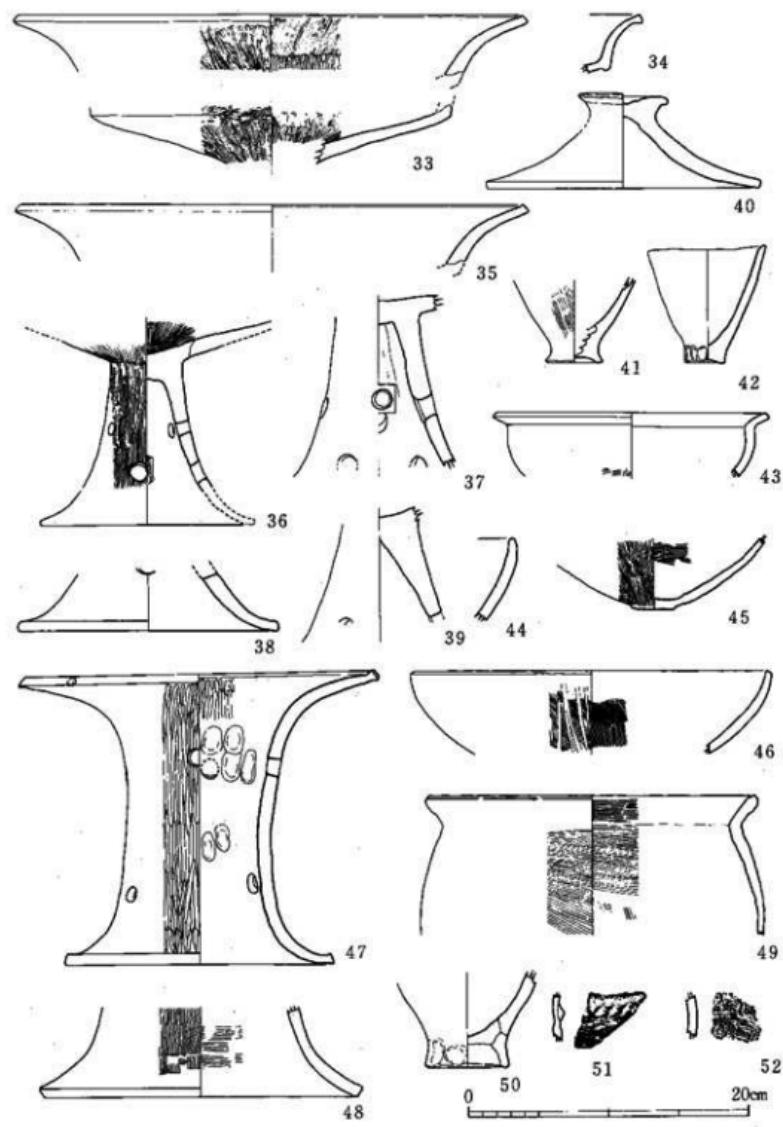
註(5)文献より



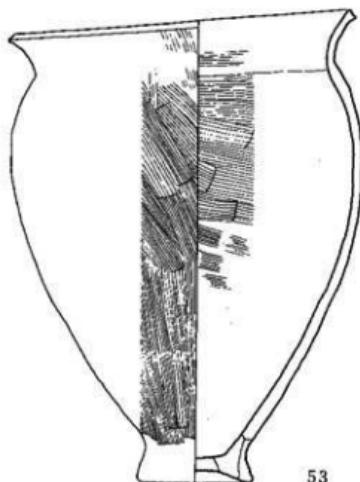
第11図 住居跡出土土器実測図(1)



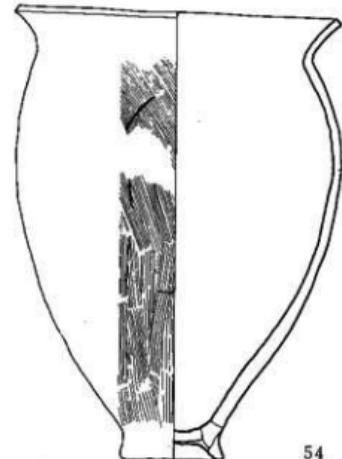
第12図 住居跡出土土器実測図(2)



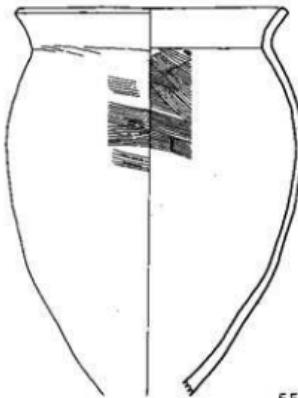
第13図 住居跡および溝出土土器実測図



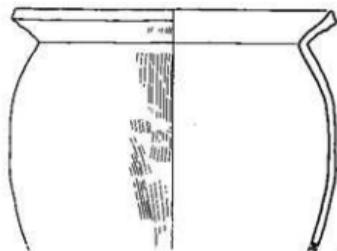
53



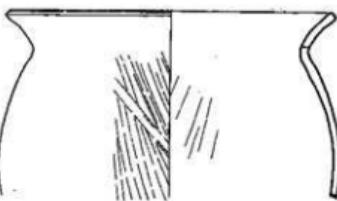
54



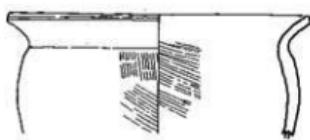
55



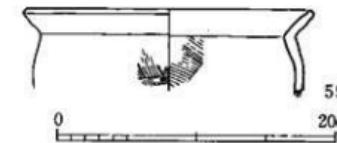
56



57



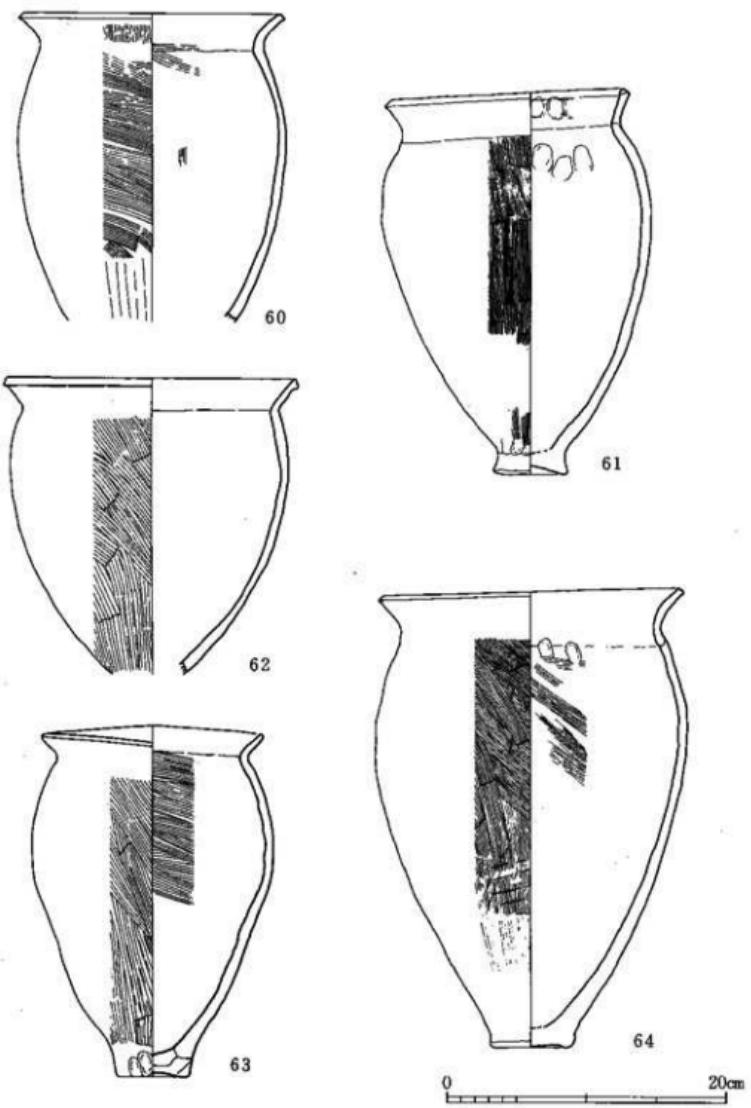
58



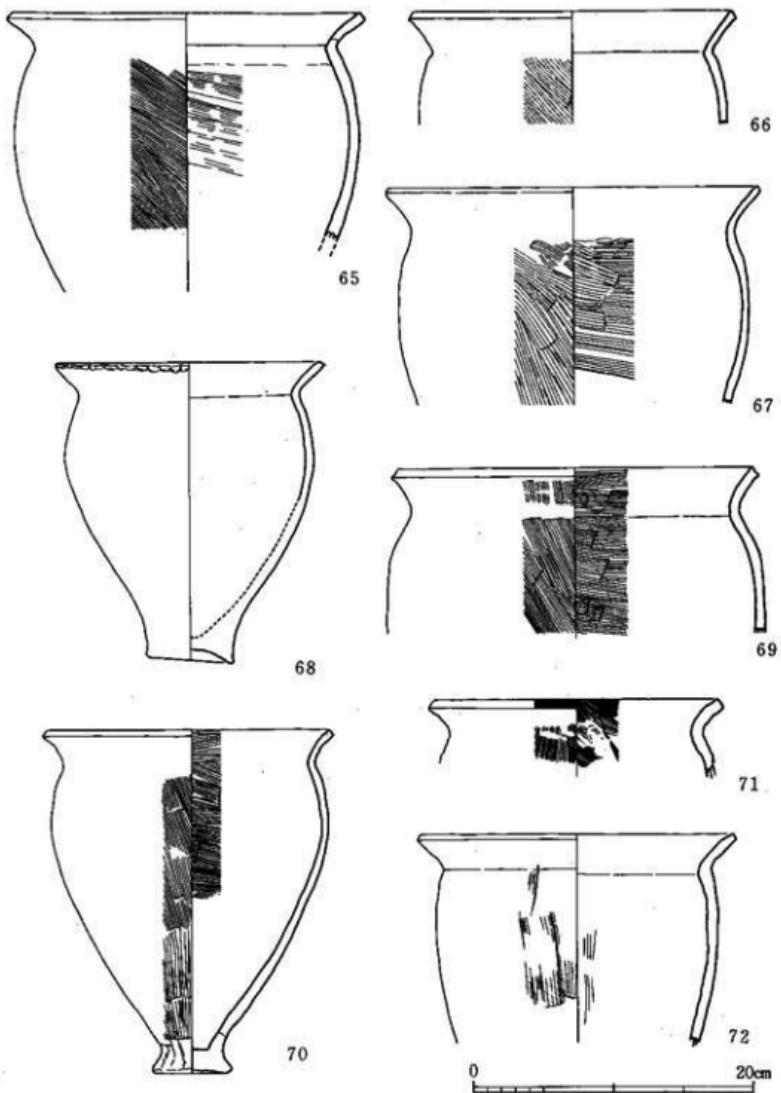
0

20cm

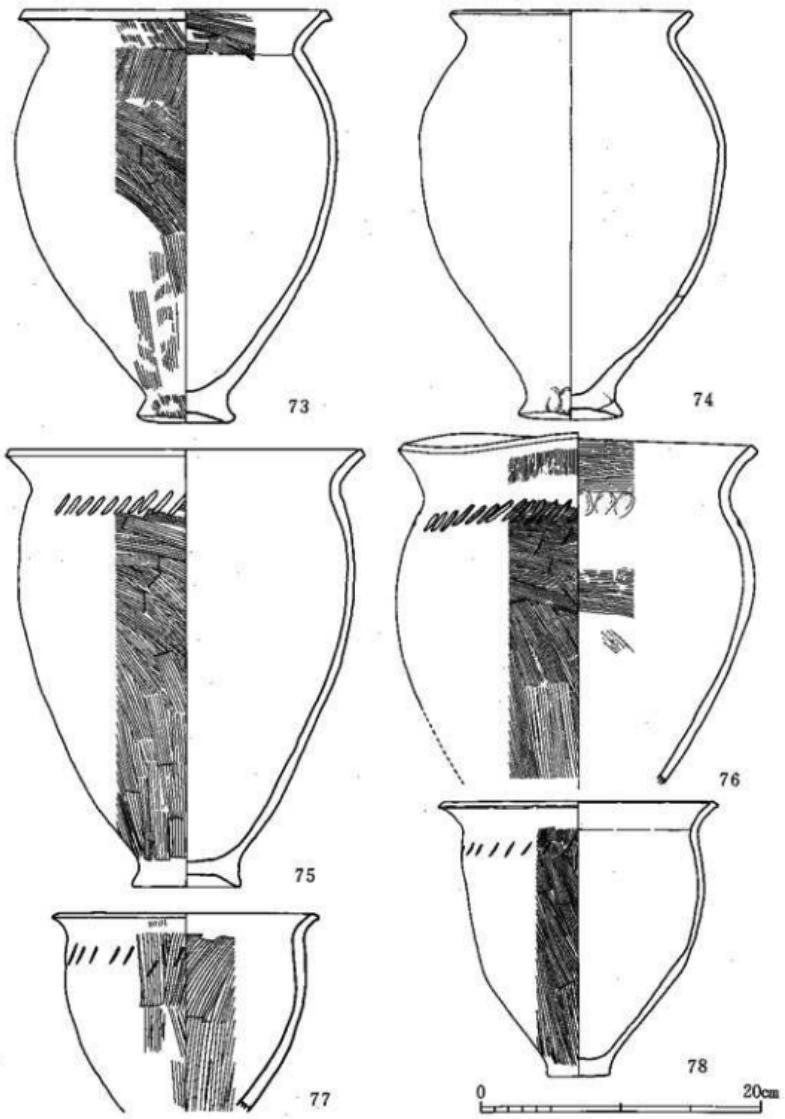
第14図 土器実測図(1)



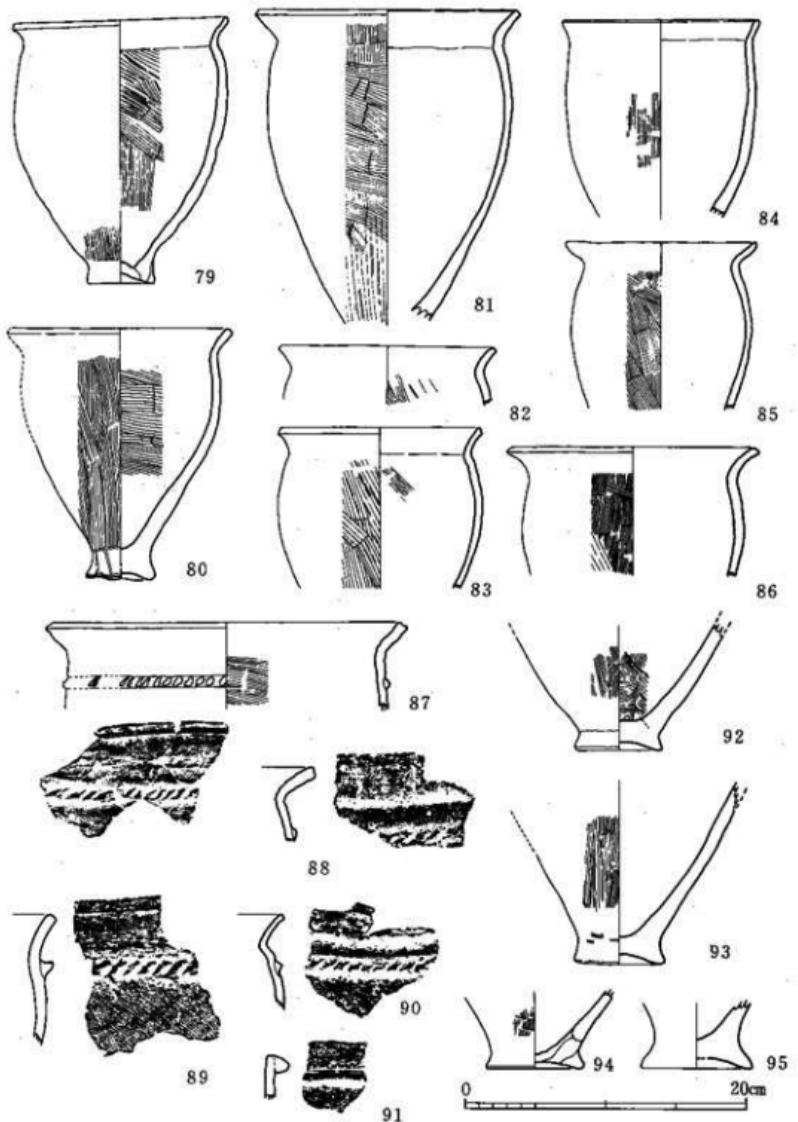
第15図 土器実測図(2)



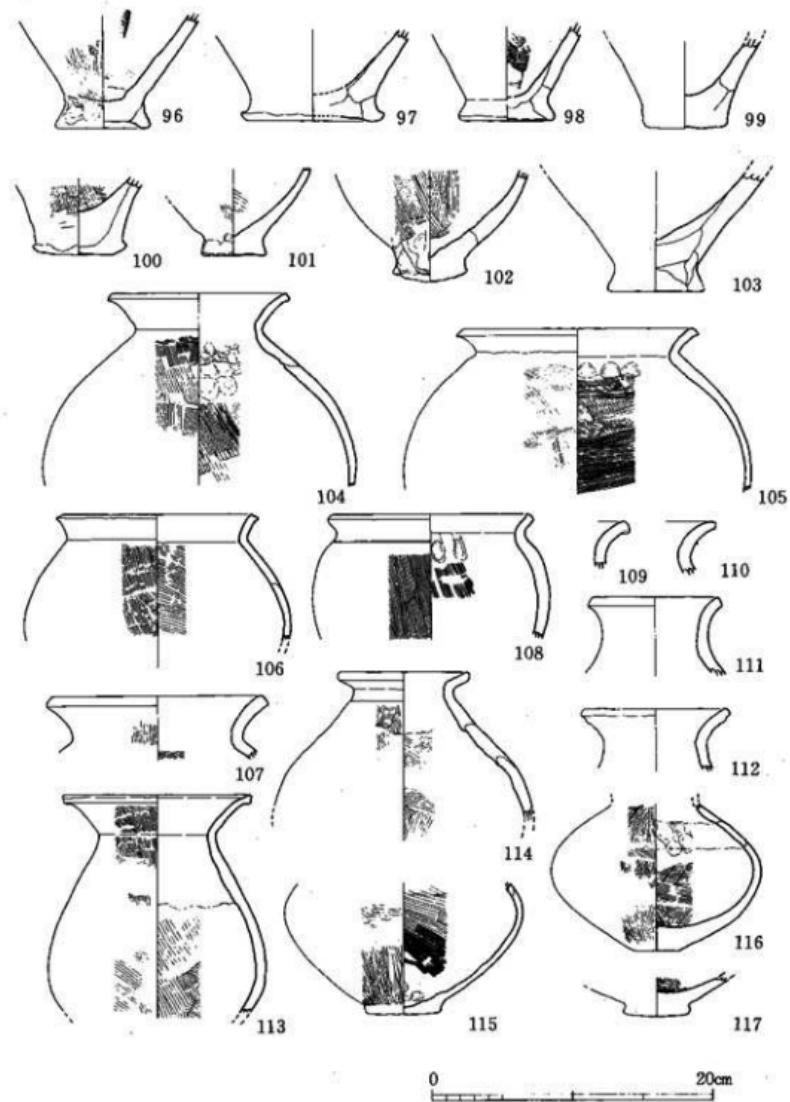
第16図 土器実測図(3)



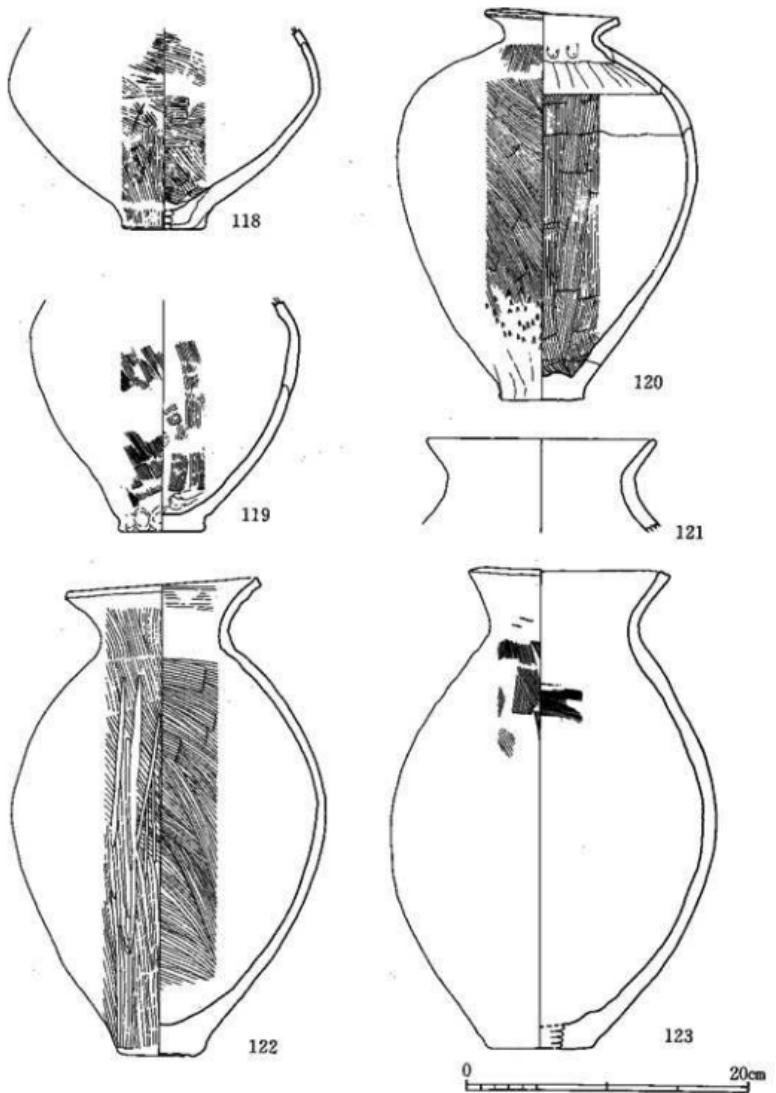
第17図 土器実測図(4)



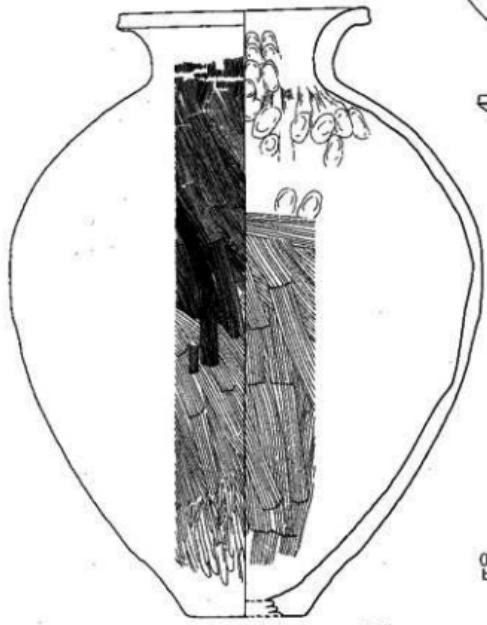
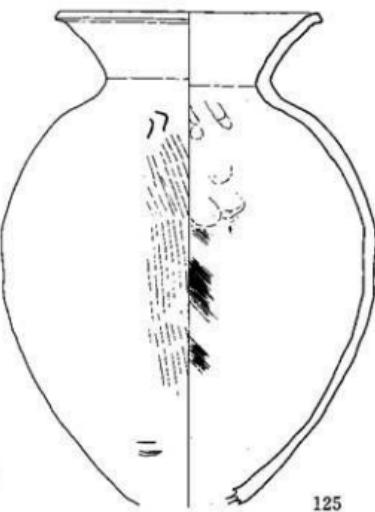
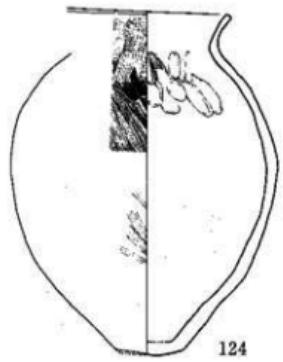
第18図 土器実測図(5)



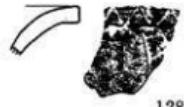
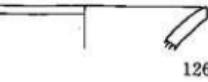
第19図 土器実測図(6)



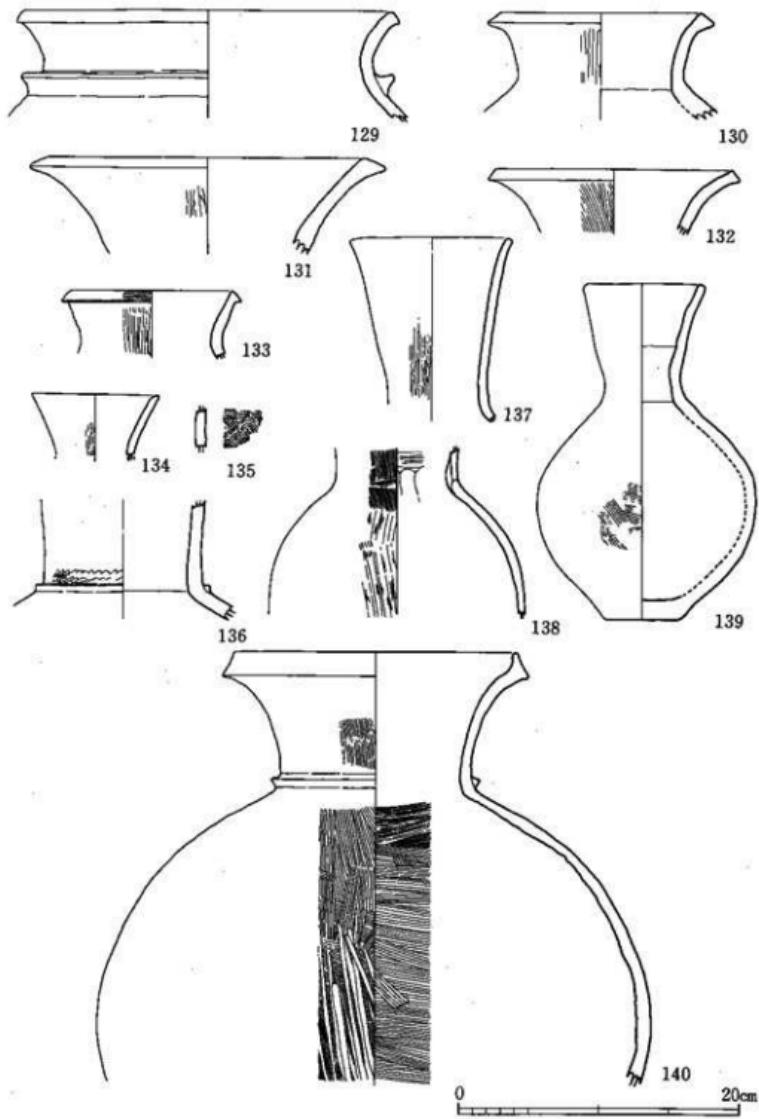
第20図 土器実測図(7)



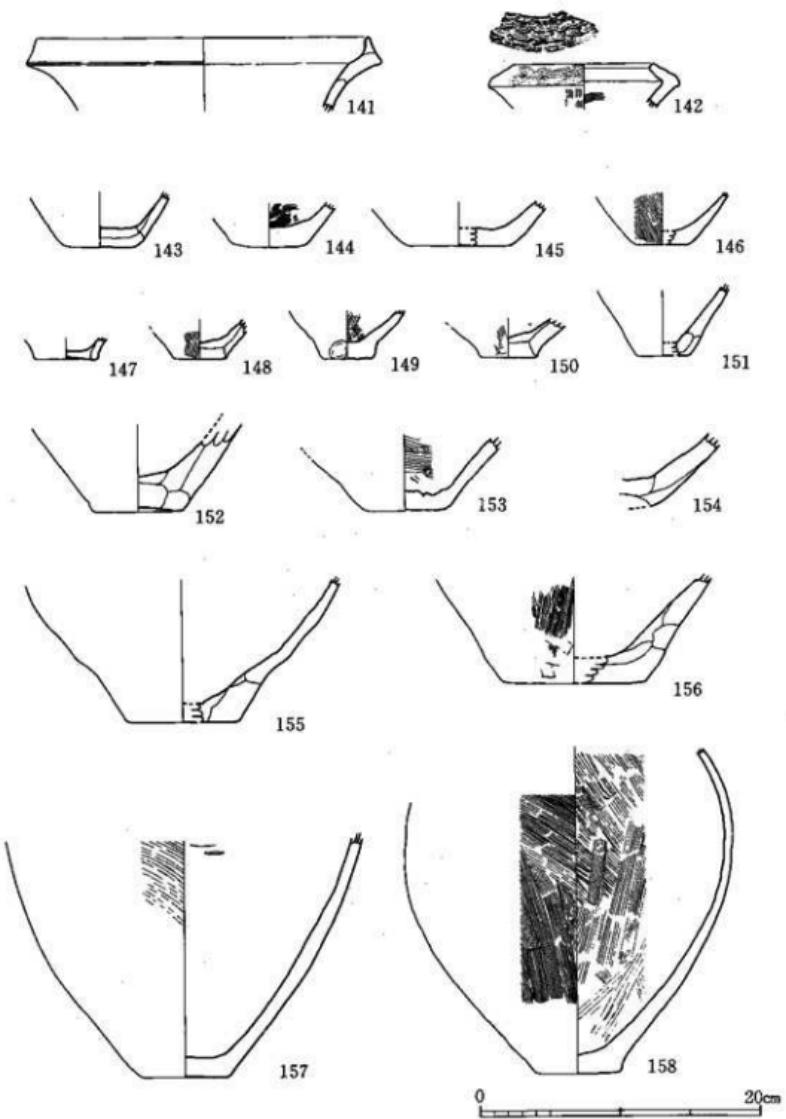
0 20cm



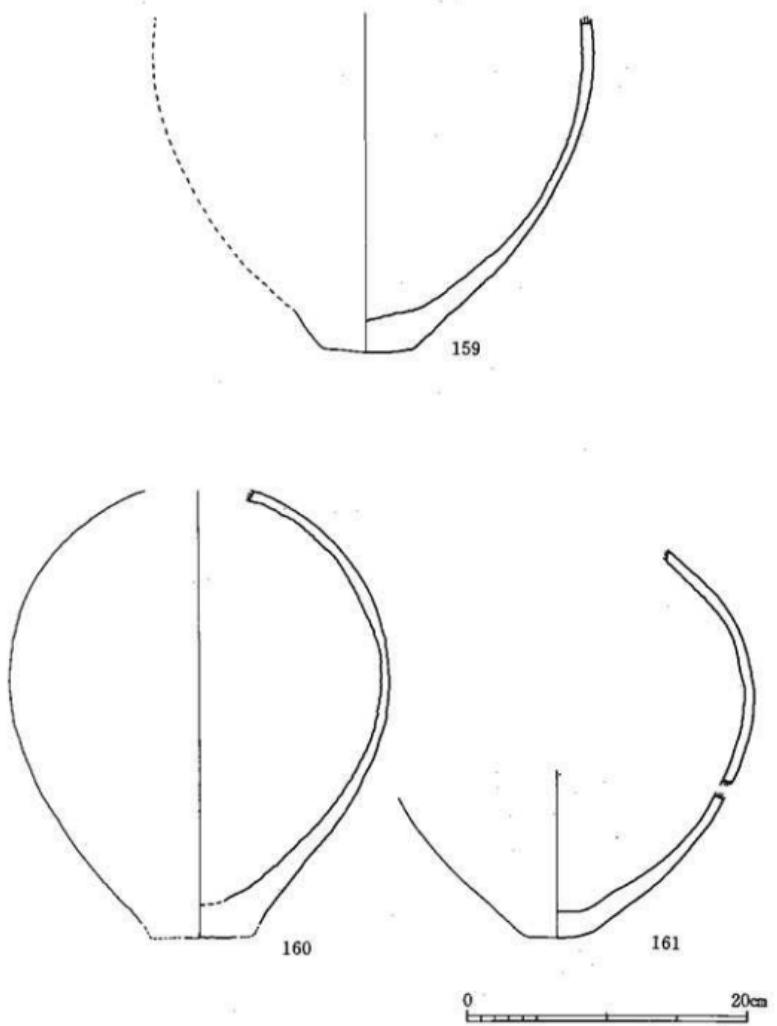
第21図 土器実測図(8)



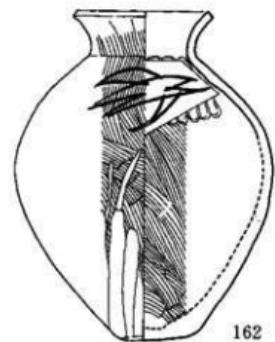
第22図 土器実測図(9)



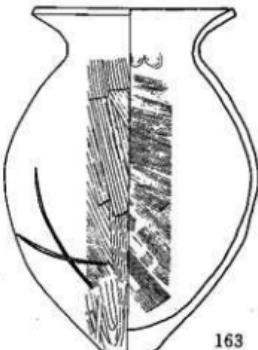
第23図 土器実測図(10)



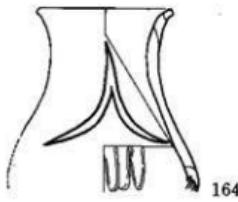
第24図 土器実測図(II)



162



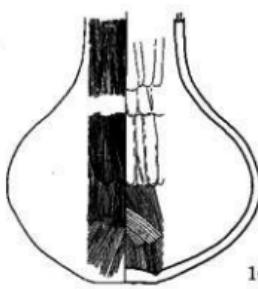
163



164



165



166



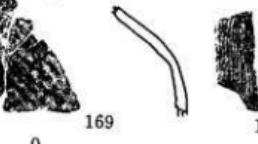
167



168



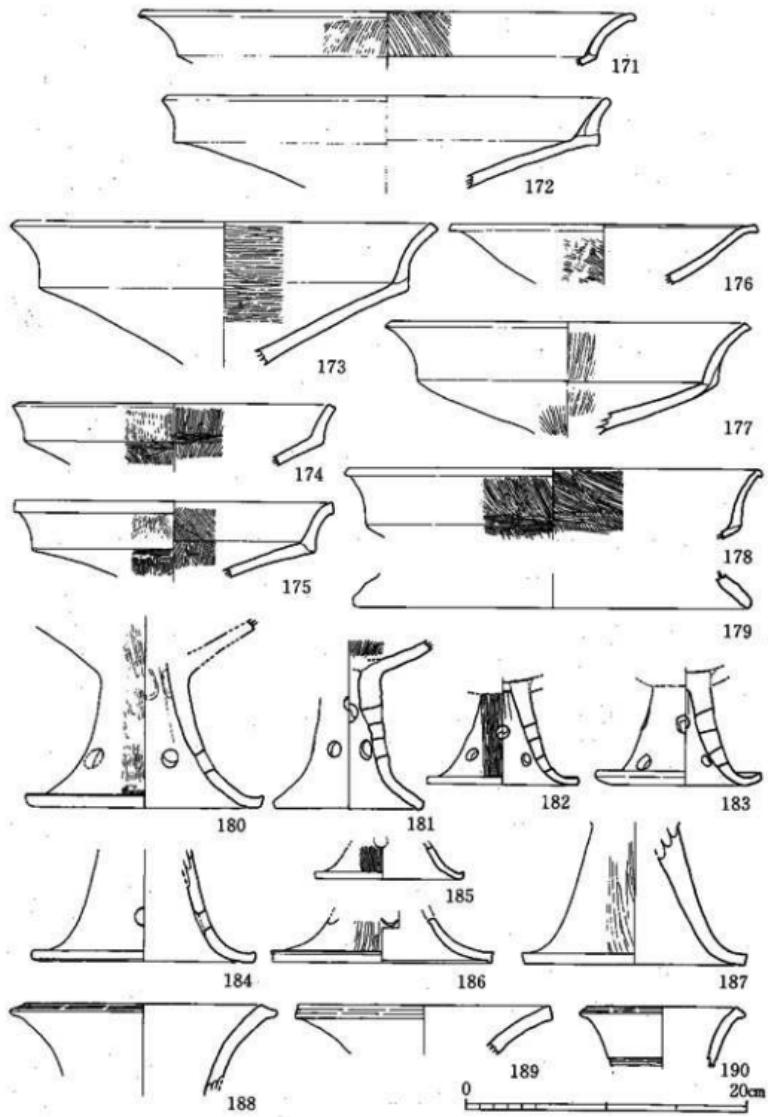
169



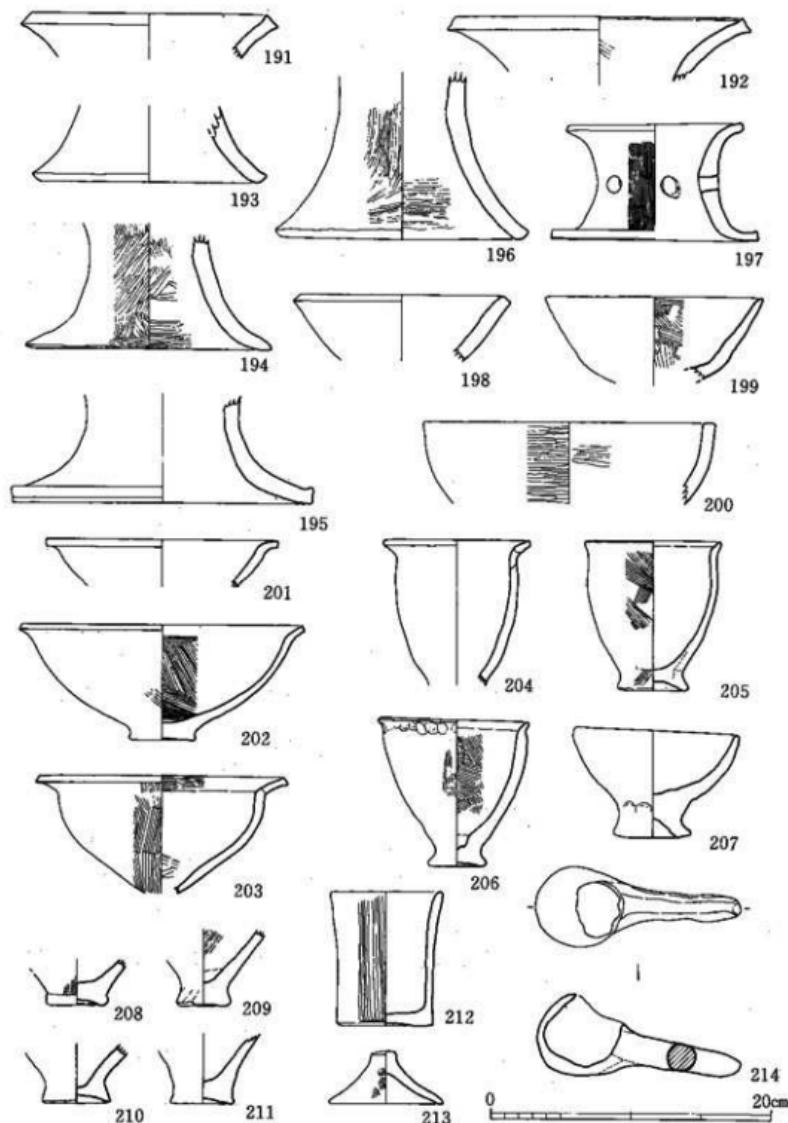
170

0 20cm

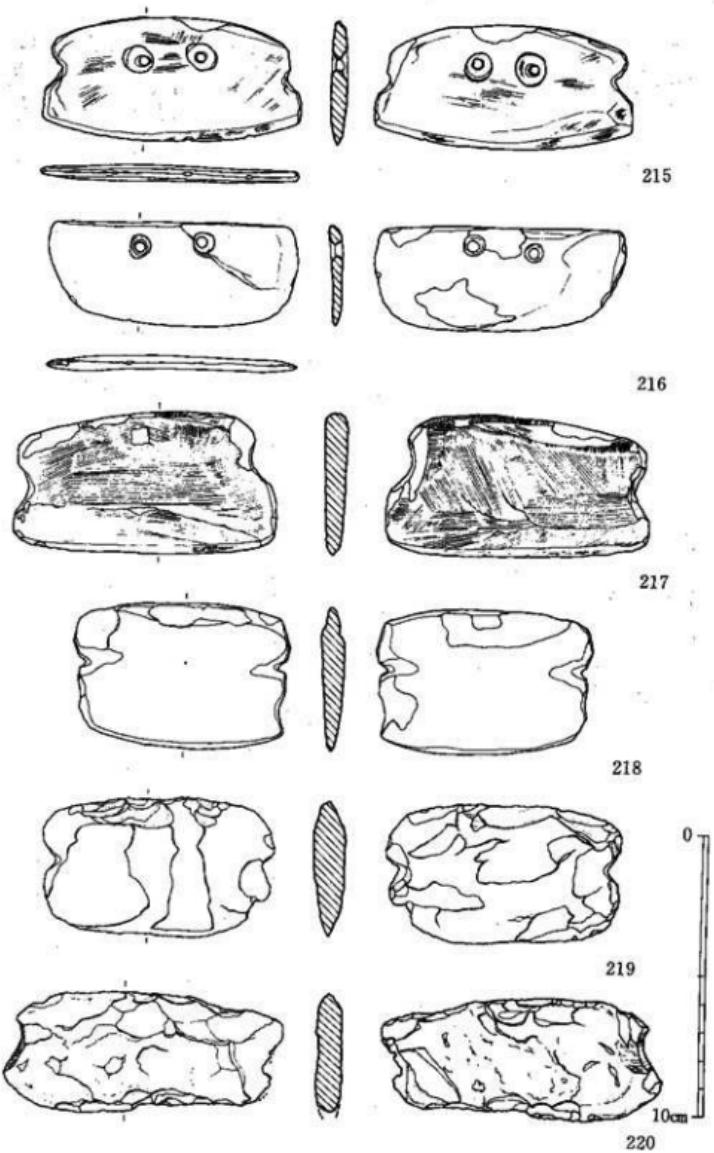
第25図 土器実測図(12)



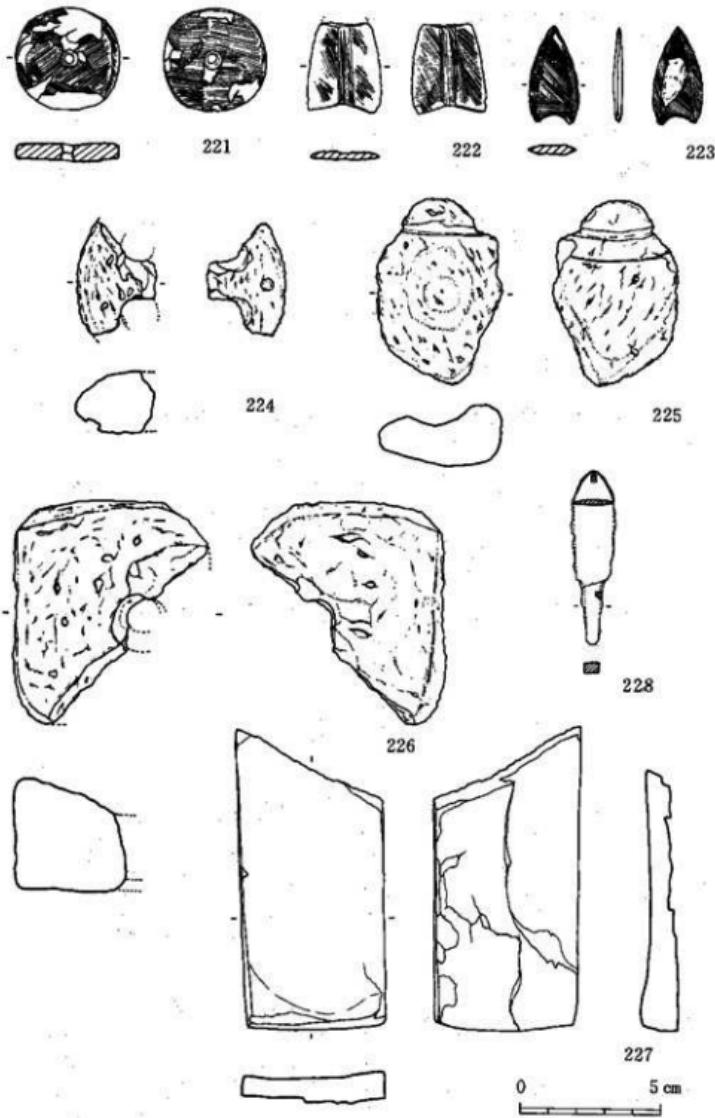
第26図 土器実測図(13)



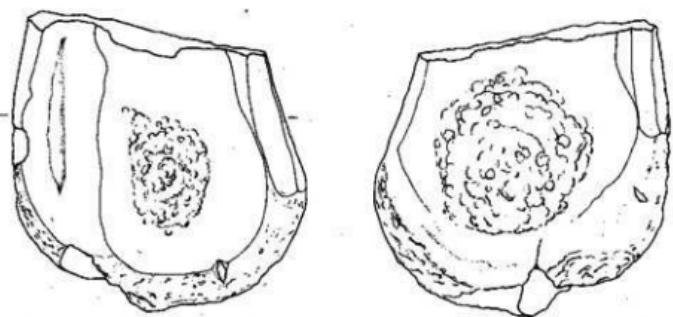
第27図 土器実測図14



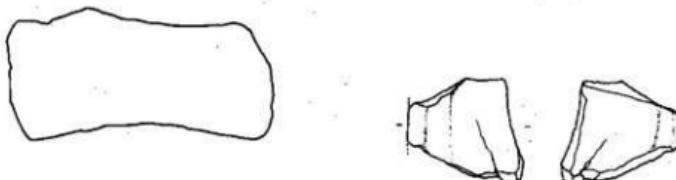
第28図 石器実測図



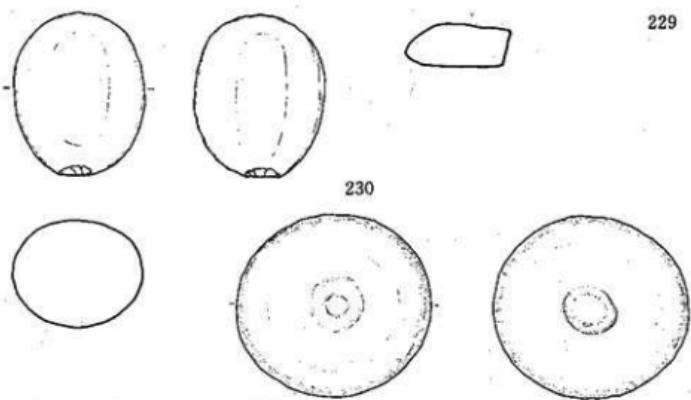
第29図 石器・鉄器実測図



228

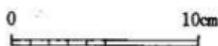


229

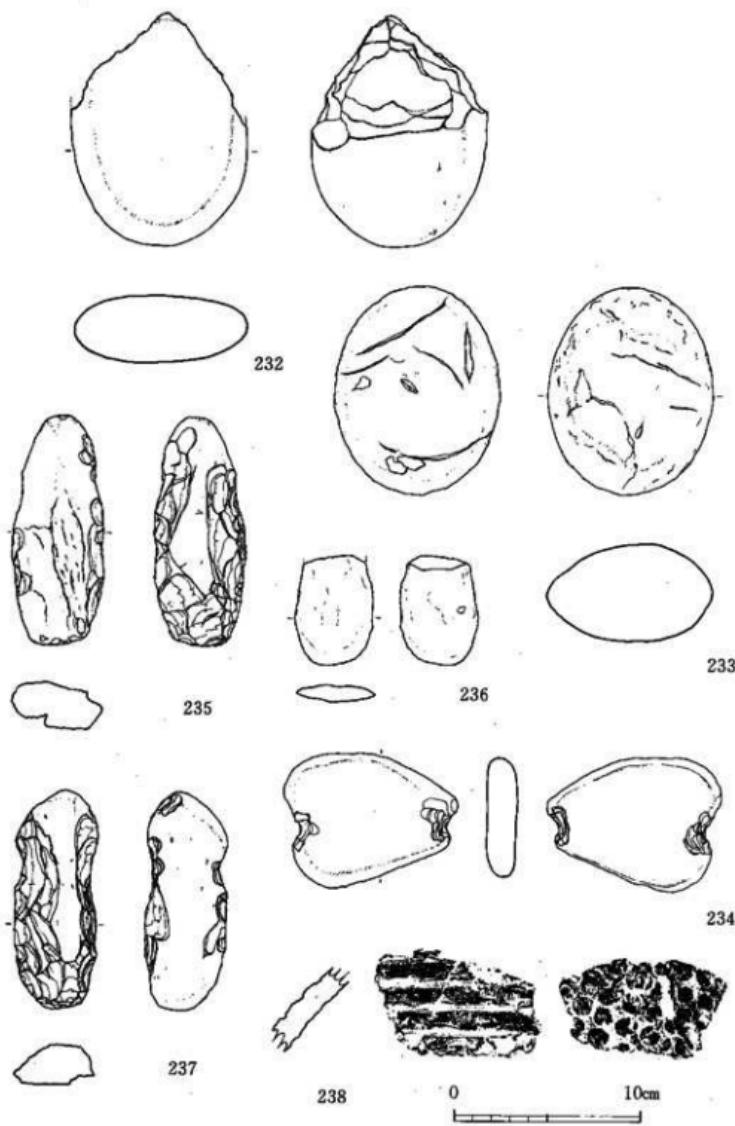


230

231



第30図 石器実測図



第31図 石器・縄文土器実測図

第3表 土器觀察表

圖面 番号	器形 種類	部位	外 面		内 面		焼成 色		内 面		外 面		焼成 色		備 考
			口縁部 横幅	側 面	口縁部 横幅	側 面	底 部	底 部	底 部	底 部	底 部	底 部	底 部	底 部	
第12回 870001	壺	ほほ先彫 口縁部 横幅 側 面	口縁部 横幅	側 面	口縁部 横幅 側 面	側 面	底 部	底 部	底 部	底 部	底 部	底 部	底 部	底 部	スス付着 住跡露出土
"	"	口縁部 横幅 側 面	口縁部 横幅	側 面	口縁部 横幅	側 面	底 部	底 部	底 部	底 部	底 部	底 部	底 部	底 部	スス付着 住跡
"	870002	"	口縁部 横幅 側 面	口縁部 横幅	側 面	口縁部 横幅	側 面	底 部	底 部	底 部	底 部	底 部	底 部	底 部	スス付着 住跡
"	870003	"	口縁部 横幅 側 面	口縁部 横幅	側 面	口縁部 横幅	側 面	底 部	底 部	底 部	底 部	底 部	底 部	底 部	スス付着 住跡
"	870004	"	口縁部 横幅 側 面	口縁部 横幅	側 面	口縁部 横幅	側 面	底 部	底 部	底 部	底 部	底 部	底 部	底 部	スス付着 住跡
"	870005	"	口縁部 横幅 側 面	口縁部 横幅	側 面	口縁部 横幅	側 面	底 部	底 部	底 部	底 部	底 部	底 部	底 部	スス付着 住跡
"	870006	"	口縁部 横幅 側 面	口縁部 横幅	側 面	口縁部 横幅	側 面	底 部	底 部	底 部	底 部	底 部	底 部	底 部	スス付着 住跡
"	870007	"	口縁部 横幅 側 面	口縁部 横幅	側 面	口縁部 横幅	側 面	底 部	底 部	底 部	底 部	底 部	底 部	底 部	スス付着 住跡
"	870008	"	口縁部 横幅 側 面	口縁部 横幅	側 面	口縁部 横幅	側 面	底 部	底 部	底 部	底 部	底 部	底 部	底 部	スス付着 住跡
第12回 870009	"	口縁部 横幅 側 面	口縁部 横幅	側 面	口縁部 横幅	側 面	底 部	底 部	底 部	底 部	底 部	底 部	底 部	底 部	スス付着 住跡
"	870010	"	口縁部 横幅 側 面	口縁部 横幅	側 面	口縁部 横幅	側 面	底 部	底 部	底 部	底 部	底 部	底 部	底 部	スス付着 住跡
"	870011	小型 壺	口縁部 横幅 側 面	口縁部 横幅	側 面	口縁部 横幅	側 面	底 部	底 部	底 部	底 部	底 部	底 部	底 部	スス付着 住跡
"	870012	小型 壺	口縁部 横幅 側 面	口縁部 横幅	側 面	口縁部 横幅	側 面	底 部	底 部	底 部	底 部	底 部	底 部	底 部	スス付着 住跡
"	870013	合 掌	口縁部 横幅 側 面	口縁部 横幅	側 面	口縁部 横幅	側 面	底 部	底 部	底 部	底 部	底 部	底 部	底 部	スス付着 住跡
"	870014	壺	口縁部 横幅 側 面	口縁部 横幅	側 面	口縁部 横幅	側 面	底 部	底 部	底 部	底 部	底 部	底 部	底 部	スス付着 住跡
"	870015	"	口縁部 横幅 側 面	口縁部 横幅	側 面	口縁部 横幅	側 面	底 部	底 部	底 部	底 部	底 部	底 部	底 部	スス付着 住跡
"	870016	"	口縁部 横幅 側 面	口縁部 横幅	側 面	口縁部 横幅	側 面	底 部	底 部	底 部	底 部	底 部	底 部	底 部	スス付着 住跡

図面番号	測量番号	基形	部位	外観	内観	構成	外観	内観	輪	土	備考
第129	870017	蝶	底盤ナデ	開 開 ハケ 内凹部 ナデ	好	浅鉛錆 (1018.2/4)	鑿 (7.518.7/4)	1~2mm、白・灰・褐色の鉄粒 赤褐色の鉄粉を含む	1~2mm、白・灰・褐色の鉄粒 赤褐色の鉄粉を含む	住	
"	870018	"	底盤	開 開 ハケ	ナデ	に付いた黒い錆 底 開 ハケ	鑿 (7.518.7/4)	1~3mm鉆、R毛が鉻、黄鉄 赤褐色の鉄粉を含む	1~3mm鉆、R毛が鉻、黄鉄 赤褐色の鉄粉を含む	住	
"	870019	"	底盤	開 開 ハケ	ナデ	ナデ	底 (1018.7/4)	に付いた黒い錆 底 (1018.7/4)	底 (517.5/4)	0.5~4mm鉆、白・黒・ 赤褐色の鉄粉を含む	住
"	870020	"	底盤	開 開 ハケ	ナデ	ナデ	底 (1018.7/4)	に付いた黒い錆 底 (1018.7/4)	底 (517.5/4)	0.5~2.5mm鉆、白・黒・ 赤褐色の鉄粉を含む	住
"	870021	"	底盤	開 開 ハケ	ナデ (ハケのあとナデ)	ナデ (ハケのあとナデ)	底 (1018.7/4)	に付いた黒い錆 底 (1018.7/4)	底 (517.5/4)	貝石、角石灰、石灰岩 赤褐色の鉄粉を含む	住
"	870022	"	底盤	ナデ	ハケのあとナデ ~底盤	ハケのあとナデ	底 (1018.7/4)	底 (1018.7/4)	底 (517.5/4)	貝石、角石灰、石灰岩 赤褐色の鉄粉を含む	住
"	870023	"	底盤	開 開 ハケ (附近に近い)	ナデ	底 (1018.7/4)	底 (1018.7/4)	底 (517.5/4)	底 (517.5/4)	貝石、角石灰、石灰岩 赤褐色の鉄粉を含む	住
"	870024	"	口縁部	開 開 ハケ	ナデ	口縁部 壁 開 開 ハケ	底 (1018.7/4)	底 (1018.7/4)	底 (517.5/4)	貝石、角石灰、石灰岩 赤褐色の鉄粉を含む	住
"	870025	"	定形	ハケ	ナデ	口縁部 上端 開 開 ハケ	底 (1018.7/4)	底 (1018.7/4)	底 (517.5/4)	貝石、角石灰、石灰岩 赤褐色の鉄粉を含む	住
"	870026	"	口縁部	開 開 ハケ	ナデ	口縁部 壁 開 開 ハケ	底 (1018.7/4)	底 (1018.7/4)	底 (517.5/4)	貝石、角石灰、石灰岩 赤褐色の鉄粉を含む	住
"	870027	蝶	口縁部	開 開 ハケ	ナデ	口縁部 壁 開 開 ハケ	底 (1018.7/4)	底 (1018.7/4)	底 (517.5/4)	貝石、角石灰、石灰岩 赤褐色の鉄粉を含む	住
"	870028	蝶	底盤	ナデ (割りよう)	ナデ (部分的にハケ粗筋)	ナデ (部分的にハケ粗筋)	底 (1018.7/4)	底 (1018.7/4)	底 (517.5/4)	貝石、角石灰、石灰岩 赤褐色の鉄粉を含む	住
"	870029	"	口縁部	開 開 ハケ	ナデ	ナデ	底 (1018.7/4)	底 (1018.7/4)	底 (517.5/4)	貝石、角石灰、石灰岩 赤褐色の鉄粉を含む	住
"	870030	"	口縁部	開 開 ハケ	ハケ	口縁部 壁 開 開 ハケ	底 (1018.7/4)	底 (1018.7/4)	底 (517.5/4)	貝石、角石灰、石灰岩 赤褐色の鉄粉を含む	住
"	870031	高杯	杯 部	開 開 ハケ	ナデ	壁部下 壁 以下 ミガキ	底 (1018.7/2)	底 (1018.7/2)	底 (1018.7/2)	貝石、角石灰、石灰岩 赤褐色の鉄粉を含む	住
第130回	870032	"	杯 部	開 開 ハケ	ミガキ	ミガキ	底 (1018.7/4)	底 (1018.7/4)	底 (1018.7/4)	貝石、角石灰、石灰岩 赤褐色の鉄粉を含む	住

図面番号	規格	形状	材質	外観		内観		被覆		土		備考
				前面	背面	前面	背面	上部	下部	上部	下部	
第1820 870033	高杯	杯形	セガサ	セガサ	セガサ	良好	良好	被覆 (7.5R 7/6) にふくらみ有り	被覆 (7.5R 7/6) にふくらみ有り	精緻	精緻	870032と同一樹種 で、形状が異なる 事がある。
"	870034	杯形	セガサ	セガサ	セガサ	良好	良好	被覆 (7.5R 7/6) にふくらみ有り	被覆 (7.5R 7/6) にふくらみ有り	精緻	精緻	870033と同一樹種 で、形状が異なる 事がある。
"	870035	杯形	口縁滑溜、側ナード 口縁滑溜、側ナード	セガサ	セガサ	良好	良好	被覆 (7.5R 8/4)	被覆 (7.5R 7/6)	石英・黒色の觸感	触感無し	住
"	870036	杯形	口縁滑溜、側ナード 口縁滑溜、側ナード	セガサ	セガサ	良好	良好	被覆 (7.5R 8/4)	被覆 (7.5R 8/4)	石英・黒色の觸感	触感無し	住
"	870037	杯形	~輪把	不明 (触感のほか)	不明	やや あるいは	良好	被覆 (7.5R 7/6)	被覆 (7.5R 7/6)	石英・白色の觸感を若干有る	触感無し	上下2箇所に迷走 した輪把が多く有る
"	870038	杯形	不明	不明	不明	良好	良好	被覆 (7.5R 7/6)	被覆 (7.5R 7/6)	0.5~1mmの輪筋・石英・白 色の触感を含む	触感無し	迷走があり
"	870039	杯形	~輪把	セガサ (先端枝が有り)	ナード	良好	良好	被覆 (7.5R 8/4)	被覆 (7.5R 8/4)	1~2mmの灰・灰・黒・褐色の触 感を含む	触感無し	住
"	870040	筒	天井形 ~底凹	ナード	ナード	良好	良好	被覆 (7.5R 8/4)	被覆 (7.5R 7/6)	0.5~2mmの輪筋・白色の触 感を含む	触感無し	住
"	870041	小型	開拓	開拓 ハケ	ナード (てこひき)	良好	良好	被覆 (7.5R 7/6)	被覆 (7.5R 7/6)	輪筋を全体に有する。	輪筋を含む	住
"	870042	林	~底凹	ナード	ナード	良好	良好	被覆 (7.5R 8/4)	被覆 (7.5R 7/6)	0.5~2mmの触感を含む。	触感無し	住
"	870043	林	口縁 ~輪把	口縁滑溜、側ナード	口縁滑溜、側ナード	良好	良好	被覆 (7.5R 7/6)	被覆 (7.5R 7/6)	石英片・黒色が多少混合し る。	触感無化粧無し	住
"	870044	筒	口縁	一軸ハケ開拓	一軸ハケ開拓	良好	良好	被覆 (7.5R 7/6)	被覆 (7.5R 7/6)	0.5~2mmの輪筋・白色の触 感を含む	触感無し	住
"	870045	林	開拓	ハケのあとセガサ	開拓 ハケ 林下部一筋	良好	良好	被覆 (7.5R 7/6)	被覆 (7.5R 7/6)	0.5~1mmの輪筋を含む。	触感無し	住
"	870046	筒	口縁	口縁滑溜、側ナード その上部ハケ	口縁滑溜、側ナード その上部ハケ	良好	良好	被覆 (7.5R 7/6)	被覆 (7.5R 7/6)	1mmの輪筋以外、灰・褐色・白色の触 感を含む。	触感無し	住
"	870047	筒	口縁	セガサ	セガサ	良好	良好	被覆 (10R 8/4)	被覆 (10R 8/4)	触感無し	触感無し	口縁部に網織 状の輪筋有り。
"	870048	筒	筒	上部 ハケ	上部 ハケ	良好	良好	被覆 (10R 8/4)	被覆 (10R 8/4)	1~2mmの葉石有り、灰・褐色 の触感を含む。	触感無し	住

図面 番号	測定部 番号	面形 部位	外 面			内 面			被 容	土 質	備 考
			外 縦 面	外 横 面	内 縦 面	内 横 面	外 縦 面	内 横 面			
第13回 870649	調	口縫 ～脚部 脚 部 ハケ	口縫 脚 部付近 脚 ナデ	ハケ	ハケ	内縫縫 脚 部	内縫縫 脚 部	内縫縫 脚 部	内縫縫 脚 部	白色 白色の砂粒 白色の砂粒を含む	白色 白色の砂粒
"	870650	"	底 部 ナデ			ナデ			内縫縫 脚 部	白色 白色の砂粒を含む	白色 白色の砂粒
"	870651	凸 壁 調	凸壁 右脚部	凸壁に斜方向の糸孔 脚 部 ナデ	不明(穿孔)	内縫縫 脚 部	内縫縫 脚 部	内縫縫 脚 部	内縫縫 脚 部	白色 白色・褐色の砂粒を多く含む 白色の砂粒	白色 白色の砂粒を多く含む
"	870652	直	体側片		不明	内縫縫 脚 部	内縫縫 脚 部	内縫縫 脚 部	内縫縫 脚 部	白色 白色・褐色の砂粒を多く含む 白色の砂粒	白色 白色の砂粒を多く含む
第14回 870653	模	充 分	口縫縫 脚 部	口縫縫 脚 部付近 脚 部 ハケ	口縫縫 脚 部 ハケ	内縫縫 脚 部 ハケ	内縫縫 脚 部 ハケ	内縫縫 脚 部 ハケ	内縫縫 脚 部 ハケ	白色 白色の砂粒を多く含む 白色の砂粒	白色 白色の砂粒を多く含む
"	870654	"	完 形	脚 下半部 脚 部 ハケ	脚 下半部 脚 部 ハケ	脚 下半部 脚 部 ハケ	脚 下半部 脚 部 ハケ	脚 下半部 脚 部 ハケ	脚 下半部 脚 部 ハケ	白色 白色の砂粒を多く含む 白色の砂粒	白色 白色の砂粒を多く含む
"	870655	"	口縫	口縫縫 脚 部 ハケ	口縫縫 脚 部 ハケ	脚 下半部 脚 部 ハケ	脚 下半部 脚 部 ハケ	脚 下半部 脚 部 ハケ	脚 下半部 脚 部 ハケ	白色 白色の砂粒を多く含む 白色の砂粒	白色 白色の砂粒を多く含む
"	870656	"	口縫	口縫縫 脚 部 ハケ	口縫縫 脚 部 ハケ	脚 下半部 脚 部 ハケ	脚 下半部 脚 部 ハケ	脚 下半部 脚 部 ハケ	脚 下半部 脚 部 ハケ	白色 白色の砂粒を多く含む 白色の砂粒	白色 白色の砂粒を多く含む
"	870657	"	口縫	口縫縫 脚 部 ハケ	口縫縫 脚 部 ハケ	脚 下半部 脚 部 ハケ	脚 下半部 脚 部 ハケ	脚 下半部 脚 部 ハケ	脚 下半部 脚 部 ハケ	白色 白色の砂粒を多く含む 白色の砂粒	白色 白色の砂粒を多く含む
"	870658	"	口縫	口縫縫 脚 部 ハケ	口縫縫 脚 部 ハケ	脚 下半部 脚 部 ハケ	脚 下半部 脚 部 ハケ	脚 下半部 脚 部 ハケ	脚 下半部 脚 部 ハケ	白色 白色の砂粒を多く含む 白色の砂粒	白色 白色の砂粒を多く含む
"	870659	"	口縫	口縫縫 脚 部 ハケ	口縫縫 脚 部 ハケ	脚 下半部 脚 部 ハケ	脚 下半部 脚 部 ハケ	脚 下半部 脚 部 ハケ	脚 下半部 脚 部 ハケ	白色 白色の砂粒を多く含む 白色の砂粒	白色 白色の砂粒を多く含む
第15回 870660	"	口縫	脚 下半部 脚 部 ハケ	口縫縫 脚 下半部 脚 部 ハケ	脚 下半部 脚 部 ハケ	脚 下半部 脚 部 ハケ	脚 下半部 脚 部 ハケ	脚 下半部 脚 部 ハケ	脚 下半部 脚 部 ハケ	白色 白色の砂粒を多く含む 白色の砂粒	白色 白色の砂粒を多く含む
"	870661	"	口縫	脚 下半部 脚 部 ハケ	口縫縫 脚 下半部 脚 部 ハケ	脚 下半部 脚 部 ハケ	脚 下半部 脚 部 ハケ	脚 下半部 脚 部 ハケ	脚 下半部 脚 部 ハケ	白色 白色の砂粒を多く含む 白色の砂粒	白色 白色の砂粒を多く含む
"	870662	"	口縫	脚 下半部 脚 部 ハケ	口縫縫 脚 下半部 脚 部 ハケ	脚 下半部 脚 部 ハケ	脚 下半部 脚 部 ハケ	脚 下半部 脚 部 ハケ	脚 下半部 脚 部 ハケ	白色 白色の砂粒を多く含む 白色の砂粒	白色 白色の砂粒を多く含む
"	870663	"	～足6	脚 下半部 脚 部 ハケ	脚 下半部 脚 部 ハケ	脚 下半部 脚 部 ハケ	脚 下半部 脚 部 ハケ	脚 下半部 脚 部 ハケ	脚 下半部 脚 部 ハケ	白色 白色の砂粒を多く含む 白色の砂粒	白色 白色の砂粒を多く含む
"	870664	"	口縫	脚 下半部 脚 部 ハケ	脚 下半部 脚 部 ハケ	脚 下半部 脚 部 ハケ	脚 下半部 脚 部 ハケ	脚 下半部 脚 部 ハケ	脚 下半部 脚 部 ハケ	白色 白色の砂粒を多く含む 白色の砂粒	白色 白色の砂粒を多く含む

層番 号	地質名	岩形	組位	外 面		内 面		火成 岩		色		層 内		地 土		備 考
				露 出	断 面	露 出	断 面	良 好	中 等	良 好	中 等	1m 厚	1m 厚	1m 厚	1m 厚	
第1622 870065	侵	口縫 ～断面	口縫部 地ナゲ ハケのあととナデ 下半部	口縫部 地ナゲ ハケ	口縫部 地ナゲ ハケ	口縫部 地ナゲ ハケ	口縫部 地ナゲ ハケ	良 好	中 等	良 好	中 等	1m 厚	1m 厚	1m 厚	1m 厚	スス付着 化粧粉含む
"	870066	ル	～断面 剥 落 ハケ	口縫部 地ナゲ ハケ	口縫部 地ナゲ ハケ	口縫部 地ナゲ ハケ	口縫部 地ナゲ ハケ	良 好	中 等	良 好	中 等	1m 厚	1m 厚	1m 厚	1m 厚	スス付着 化粧粉含む
"	870067	ル	～断面 剥 落 ハケ	口縫部 地ナゲ ハケ	口縫部 地ナゲ ハケ	口縫部 地ナゲ ハケ	口縫部 地ナゲ ハケ	良 好	中 等	良 好	中 等	1m 厚	1m 厚	1m 厚	1m 厚	スス付着 化粧粉含む
"	870083	ル	火成岩 不 規	口縫部 剥 落 ハケ	口縫部 剥 落 ハケ	口縫部 剥 落 ハケ	口縫部 剥 落 ハケ	良 好	中 等	良 好	中 等	1m 厚	1m 厚	1m 厚	1m 厚	スス付着 化粧粉含む
"	870093	ル	～断面 剥 落 ハケ	口縫部 剥 落 ハケ	口縫部 剥 落 ハケ	口縫部 剥 落 ハケ	口縫部 剥 落 ハケ	良 好	中 等	良 好	中 等	1m 厚	1m 厚	1m 厚	1m 厚	スス付着 化粧粉含む
"	870101	ル	～断面 剥 落 ハケ	口縫部 剥 落 ハケ	口縫部 剥 落 ハケ	口縫部 剥 落 ハケ	口縫部 剥 落 ハケ	良 好	中 等	良 好	中 等	1m 厚	1m 厚	1m 厚	1m 厚	スス付着 化粧粉含む
"	870102	ル	～断面 剥 落 ハケ	口縫部 剥 落 ハケ	口縫部 剥 落 ハケ	口縫部 剥 落 ハケ	口縫部 剥 落 ハケ	良 好	中 等	良 好	中 等	1m 厚	1m 厚	1m 厚	1m 厚	スス付着 化粧粉含む
第1119 870073	ル	火成岩 不 規	口縫部 ハケのあとと 剥 落 ハケ	口縫部 ハケのあとと 剥 落 ハケ	口縫部 ハケのあとと 剥 落 ハケ	口縫部 ハケのあとと 剥 落 ハケ	口縫部 ハケのあとと 剥 落 ハケ	良 好	中 等	良 好	中 等	1m 厚	1m 厚	1m 厚	1m 厚	スス付着 化粧粉含む
"	870074	ル	～断面 剥 落 ハケ	口縫部 剥 落 ハケ	口縫部 剥 落 ハケ	口縫部 剥 落 ハケ	口縫部 剥 落 ハケ	良 好	中 等	良 好	中 等	1m 厚	1m 厚	1m 厚	1m 厚	スス付着 化粧粉含む
"	870075	ル	～断面 剥 落 ハケ	口縫部 剥 落 ハケ	口縫部 剥 落 ハケ	口縫部 剥 落 ハケ	口縫部 剥 落 ハケ	良 好	中 等	良 好	中 等	1m 厚	1m 厚	1m 厚	1m 厚	スス付着 化粧粉含む
"	870076	ル	～断面 剥 落 ハケ	口縫部 剥 落 ハケ	口縫部 剥 落 ハケ	口縫部 剥 落 ハケ	口縫部 剥 落 ハケ	良 好	中 等	良 好	中 等	1m 厚	1m 厚	1m 厚	1m 厚	スス付着 化粧粉含む
"	870077	ル	～断面 剥 落 ハケ	口縫部 剥 落 ハケ	口縫部 剥 落 ハケ	口縫部 剥 落 ハケ	口縫部 剥 落 ハケ	良 好	中 等	良 好	中 等	1m 厚	1m 厚	1m 厚	1m 厚	スス付着 化粧粉含む
"	870078	ル	～断面 剥 落 ハケ	口縫部 剥 落 ハケ	口縫部 剥 落 ハケ	口縫部 剥 落 ハケ	口縫部 剥 落 ハケ	良 好	中 等	良 好	中 等	1m 厚	1m 厚	1m 厚	1m 厚	スス付着 化粧粉含む
第1619 870080	小 型 薄	火 成 岩	口縫部 剥 落 ハケ	口縫部 剥 落 ハケ	口縫部 剥 落 ハケ	口縫部 剥 落 ハケ	口縫部 剥 落 ハケ	良 好	中 等	良 好	中 等	1m 厚	1m 厚	1m 厚	1m 厚	スス付着 化粧粉含む

図示番号	電極位置	電極形態	電極部位	外観	内観	構成	外観	内観	地	土	備考
第10回 870081	頭 口輪～ 歯下半部	頭 頭部 ハケ	ハケのあと側ナデ 頭 頭 ハケ	口輪部 頭部 ハケ	頭 頭 内頭部 側ナデ	頭 頭 内頭部 側ナデ	頭 頭 内頭部 側ナデ	頭 頭 内頭部 側ナデ	1 mm内外 頭・足 (10W 5/4) 頭・足 (10W 4/4)	頭 頭 内頭部 側ナデ	黒色・黒色・黒色 粉多く含む
"	870082	"	頭 ～頭部	頭 ハケ (ていねい)	口輪部 頭部 ハケ	頭 頭 内頭部 側ナデ	頭 頭 内頭部 側ナデ	頭 頭 内頭部 側ナデ	明赤褐色 (5YR 5/6)	明赤褐色 (5YR 5/6)	金色の葉地と赤色の葉地を含む
"	870083	"	頭 ～頭部	頭 頭 頭 ハケ	口輪部 頭部 ハケ	頭 頭 内頭部 側ナデ	頭 頭 内頭部 側ナデ	頭 頭 内頭部 側ナデ	にぶい黄 (10YR 7/4)	にぶい黄 (10YR 7/4)	褐色・黒灰斑の少枝を多く含む
"	870084	"	頭 ～頭部	頭 頭 頭 ハケ	口輪部 頭部 ハケ	頭 頭 内頭部 側ナデ	頭 頭 内頭部 側ナデ	頭 頭 内頭部 側ナデ	頭 頭 内頭部 側ナデ	頭 頭 内頭部 側ナデ	褐色斑合む
"	870085	"	頭 ～頭部	頭 頭 頭 ハケ	口輪部 頭部 ハケ	頭 頭 内頭部 側ナデ	頭 頭 内頭部 側ナデ	頭 頭 内頭部 側ナデ	頭 頭 内頭部 側ナデ	頭 頭 内頭部 側ナデ	1 mm内外 茶褐色・灰褐色の細胞 化粧斑合む
"	870086	"	頭 ～頭部	頭 頭 頭 ハケ	口輪部 頭部 ハケ	頭 頭 内頭部 側ナデ	頭 頭 内頭部 側ナデ	頭 頭 内頭部 側ナデ	頭 頭 内頭部 側ナデ	頭 頭 内頭部 側ナデ	褐色斑合む
"	870087	凸 頭	頭 ～頭部	頭 頭 ハケ	口輪部 頭部 ハケ	頭 頭 内頭部 側ナデ	頭 頭 内頭部 側ナデ	頭 頭 内頭部 側ナデ	頭 頭 内頭部 側ナデ	頭 頭 内頭部 側ナデ	1～2 mm褐色・灰色・白色 化粧斑合む
"	870088	凸 頭	頭 ～頭部	頭 頭 ハケ	口輪部 頭部 ハケ	頭 頭 内頭部 側ナデ	頭 頭 内頭部 側ナデ	頭 頭 内頭部 側ナデ	頭 頭 内頭部 側ナデ	頭 頭 内頭部 側ナデ	褐色の少 少多點にむし
"	870089	凸 頭	頭 ～頭部	頭 頭 ハケ	口輪部 頭部 ハケ	頭 頭 内頭部 側ナデ	頭 頭 内頭部 側ナデ	頭 頭 内頭部 側ナデ	頭 頭 内頭部 側ナデ	頭 頭 内頭部 側ナデ	1～2 mm褐色の白・灰・褐色の少 少多點にむし
"	870090	凸 頭	頭 ～頭部	頭 頭 ハケ	口輪部 頭部 ハケ	頭 頭 内頭部 側ナデ	頭 頭 内頭部 側ナデ	頭 頭 内頭部 側ナデ	頭 頭 内頭部 側ナデ	頭 頭 内頭部 側ナデ	褐色斑合む
"	870091	凸 頭	頭 ～頭部	頭 頭 ハケ	口輪部 頭部 ハケ	頭 頭 内頭部 側ナデ	頭 頭 内頭部 側ナデ	頭 頭 内頭部 側ナデ	頭 頭 内頭部 側ナデ	頭 頭 内頭部 側ナデ	褐色斑合む
"	870092	頭	頭 ～頭部	頭 頭 ハケ	口輪部 頭部 ハケ	頭 頭 内頭部 側ナデ	頭 頭 内頭部 側ナデ	頭 頭 内頭部 側ナデ	にぶい黒 (10YR 7/6) 黒 (2.5YR 7/2)	にぶい黒 (10YR 7/6) 黒 (2.5YR 7/2)	1～4 mm灰・灰・白・褐色の少 少多點にむし
"	870093	"	頭 ～頭部	頭 頭 ハケ	口輪部 頭部 ハケ	頭 頭 内頭部 側ナデ	頭 頭 内頭部 側ナデ	頭 頭 内頭部 側ナデ	にぶい黒 (10YR 7/6)	にぶい黒 (10YR 7/6)	0.5～2 mm褐色・灰褐色の少 少多點にむし
"	870094	"	頭 ～頭部	頭 頭 ハケ	口輪部 頭部 ハケ	頭 頭 内頭部 側ナデ	頭 頭 内頭部 側ナデ	頭 頭 内頭部 側ナデ	にぶい黒 (10YR 7/6)	にぶい黒 (10YR 7/6)	0.3～1 mm灰・灰・褐色の少 少多點にむし
"	870095	"	頭 ～頭部	頭 頭 ハケ	口輪部 頭部 ハケ	頭 頭 内頭部 側ナデ	頭 頭 内頭部 側ナデ	頭 頭 内頭部 側ナデ	頭 頭 内頭部 側ナデ	頭 頭 内頭部 側ナデ	0.5～2 mm褐色・灰・白・褐 褐色斑合む
第10回 870096	"	頭 ～頭部	頭 頭 ハケ	口輪部 頭部 ハケ	頭 頭 内頭部 側ナデ	頭 頭 内頭部 側ナデ	頭 頭 内頭部 側ナデ	頭 頭 内頭部 側ナデ	1～2 mm灰 灰 (2.5YR 6/1)	1～2 mm灰 灰 (2.5YR 6/1)	褐色斑合む

図面 番号	規格番号	基準部位	外観		内観		構成部		土		備考
			前面	背面	前面	背面	前面	背面	前面	背面	
第1回 870113	盤	口縁 ～脚部 ～脚部	端面一端底面 横ナデ 横ナデ	口縁底面 横ナデ 横ナデ	横ナデ 横ナデ	横ナデ 横ナデ	横底面 横ナデ	横底面 横ナデ	全付に附着合し 無色透明化合物	スス付着	
#	870114	“	口縁 ～脚部 ～脚部	「側面 横ナデ 横ナデ	口縁 横ナデ 横ナデ	横ナデ 横ナデ	横ナデ 横ナデ	横ナデ 横ナデ	透明～4mm白・灰・光沢のある黒 の状況を呈し		
#	870115	“	脚部 ～脚部 ～脚部	脚部 横ナデ 横ナデ	脚部 横ナデ 横ナデ	脚部 横ナデ 横ナデ	脚部 横ナデ 横ナデ	脚部 横ナデ 横ナデ	0.5～2mm白・黒 無色透明化合物		
#	870116	“	脚部 ～底部 ～底部	脚部 横ナデ 横ナデ 横ナデ	脚部 横ナデ 横ナデ 横ナデ	脚部 横ナデ 横ナデ 横ナデ	脚部 横ナデ 横ナデ 横ナデ	脚部 横ナデ 横ナデ 横ナデ	透明～3mm白・黒 無色透明化合物		
#	870117	“	底部 ～底部 ～底部	底部 横ナデ 横ナデ	底部 横ナデ 横ナデ	底部 横ナデ 横ナデ	底部 横ナデ 横ナデ	底部 横ナデ 横ナデ	透明～2mm白・黒 無色透明化合物		
第2回 870118	“	脚部 ～底部 ～底部	脚部 横ナデ 横ナデ	脚部 横ナデ 横ナデ	脚部 横ナデ 横ナデ	脚部 横ナデ 横ナデ	脚部 横ナデ 横ナデ	脚部 横ナデ 横ナデ	0.2～2.5mm白・黒 無色透明化合物		
#	870119	“	脚部 ～底部 ～底部	脚部 横ナデ 横ナデ	脚部 横ナデ 横ナデ	脚部 横ナデ 横ナデ	脚部 横ナデ 横ナデ	脚部 横ナデ 横ナデ	透明～全体に含む 無色透明化合物		
#	870120	“	先端 ～脚部 ～脚部	先端 横ナデ 横ナデ	先端 横ナデ 横ナデ	先端 横ナデ 横ナデ	先端 横ナデ 横ナデ	先端 横ナデ 横ナデ	1～3mm白・灰・褐色の状況 無色透明化合物		
#	870121	“	口縁 ～脚部 ～脚部	口縁 横ナデ 横ナデ	口縁 横ナデ 横ナデ	口縁 横ナデ 横ナデ	口縁 横ナデ 横ナデ	口縁 横ナデ 横ナデ	1.5mm白・褐色の状況 無色透明化合物		
#	870122	“	先端 ～脚部 ～脚部	先端 横ナデ 横ナデ	先端 横ナデ 横ナデ	先端 横ナデ 横ナデ	先端 横ナデ 横ナデ	先端 横ナデ 横ナデ	1～3mm白・黒のある白骨・黒骨 無色透明化合物		
#	870123	“	口縁 ～底部 ～底部	口縁 横ナデ 横ナデ	口縁 横ナデ 横ナデ	口縁 横ナデ 横ナデ	口縁 横ナデ 横ナデ	口縁 横ナデ 横ナデ	透明～4mm白・黒 無色透明化合物		
第3回 870124	“	口縁 ～底部 ～底部	口縁 横ナデ 横ナデ	口縁 横ナデ 横ナデ	口縁 横ナデ 横ナデ	口縁 横ナデ 横ナデ	口縁 横ナデ 横ナデ	透明～0.5～1mm 白色の状況を呈し			
#	870125	“	口縁 ～底部 ～底部	口縁 横ナデ 横ナデ	口縁 横ナデ 横ナデ	口縁 横ナデ 横ナデ	口縁 横ナデ 横ナデ	口縁 横ナデ 横ナデ	0.3～1.5mm白・透明・黒・褐色 無色透明化合物		
#	870126	“	口縁 ～底部 ～底部	口縁 横ナデ 横ナデ	口縁 横ナデ 横ナデ	口縁 横ナデ 横ナデ	口縁 横ナデ 横ナデ	口縁 横ナデ 横ナデ	0.5～3mm白・黒の多く含む 無色透明化合物		
#	870127	“	口縁 ～底部 ～底部	口縁 横ナデ 横ナデ	口縁 横ナデ 横ナデ	口縁 横ナデ 横ナデ	口縁 横ナデ 横ナデ	口縁 横ナデ 横ナデ	1～3mm白・黒と褐色の 無色透明化合物		
#	870128	“	口縁 ～底部 ～底部	口縁 横ナデ 横ナデ	口縁 横ナデ 横ナデ	口縁 横ナデ 横ナデ	口縁 横ナデ 横ナデ	口縁 横ナデ 横ナデ	1～2mm白・灰・褐色の状況 無色透明化合物		

固有 固有 番号	種名 学名	形態 部位	外 面	内 面	壁 皮	色		内 面		地 上		備考
						外 面	内 面	壁 皮	内 面	地 上	地 上	
第22回 870129	凸 椎	口輪 ～開閉 ナデ				中 央 部 ナデ		口輪部 ミガキ岩苔類 周 部 ナデ	無 色	極 薄 (2.5R 6/6)	極 薄 (7.5R 7/6)	白色の部分 に黒い斑点 がある。
"	870130	瘤	口輪 ～開閉 ナデ			口輪部 ミガキ岩苔類 周 部 ナデ	無 色	口輪部 ミガキ岩苔類 周 部 ナデ	無 色	浅 黃 (10R 8/4)	淺 黃 (10R 8/4)	1cm以下の部分の表面が多い。
"	870131	"	口輪部 瘤 部 ナデ			口輪部 ミガキ （一般形状）	不 明		口輪部 ミガキ （一般形状）	無 色	明 顯 (10R 7/6)	1～2mm、灰 色・褐色・黑色の 部分と角状部を多く含む。
"	870132	"	口輪部 瘤 部 ナデ			口輪部 ハケ		口輪部 ハケ	無 色	無 色	無 色 (7.5R 7/6)	1～2.5mm、白・灰・黑・褐色 の部分を多く含む。
"	870133	"	口輪部 瘤 部 ナデ			瘤 部 ナデ			口輪部 ハケ	無 色	無 色 (10R 8/4)	1cm以下 の部分を含む。
"	870134	"	口輪部 瘤 部 ナデ			瘤 部 ナデ		瘤 部 ナデ	無 色	無 色 (7.5R 8/4)	無 色 (7.5R 8/4)	1～2.5mm、灰 色・黑色・褐色、 スズ付着
"	870135	"	体壁片			瘤 部 ナデ		瘤 部 ナデ	無 色	無 色 (7.5R 8/4)	無 色 (7.5R 8/4)	無 色・白の部分を含む
"	870136	凸 椎	開 閉 部 ナデ			瘤 部 ナデ	不明	瘤 部 ナデ	無 色	無 色 (7.5R 8/4)	無 色 (5Y 7/1)	無 色を少し含む 石炭・無 色を含む
"	870137	無輪	口輪 ～開閉 部 ナデ			瘤 部 ナデ		瘤 部 ナデ	無 色	無 色 (7.5R 7/6)	無 色 (7.5R 7/6)	無 色による平行 線を含む
"	870138	瘤	開 閉 部 ナデ			瘤 部 ナデ		瘤 部 ナデ	無 色	無 色 (10R 6/2)	無 色 (10R 5/2)	無 色による平行 線を含む
"	870139	長筋筋	口輪 ～開閉 部 ナデ			瘤 部 ナデ		瘤 部 ナデ	無 色	無 色 (10R 8/4)	無 色 (10R 7/3)	無 色による平行 線を含む
"	870140	混合口輪	口輪 ～開閉 部 ナデ			口輪 ～開閉 部 ナデ	不 明	口輪 ～開閉 部 ナデ	無 色	無 色 (5Y 7/6)	無 色 (5Y 7/6)	無 色による平行 線を含む
第22回 870141	瘤	混合口輪				口輪部 ハケのあと ナデ		口輪部 ハケのあと ナデ	無 色	無 色 (5Y 7/6)	無 色 (5Y 7/6)	無 色による平行 線を含む
"	870142	瘤	口輪部 瘤 部 ナデ			口輪部 ハケのあと ナデ		口輪部 ハケのあと ナデ	無 色	無 色 (10R 8/4)	無 色 (10R 8/4)	無 色による平行 線を含む
"	870143	瘤	底 部 部 ナデ			口輪部 ハケのあと ナデ		口輪部 ハケのあと ナデ	無 色	無 色 (10R 7/6)	無 色 (10R 7/6)	無 色による平行 線を含む
"	870144	"	底 部 部 ナデ			口輪部 ハケのあと ナデ		口輪部 ハケのあと ナデ	無 色	無 色 (7.5R 8/0)	無 色 (5Y 7/0)	無 色による平行 線を含む

地名	標高	経緯	地形	地勢	外観	内観	成土過程	成土色	調査面	地質	土	備考
新204号	870.45	最	底	不明	ナデ	ナデ	風好	(5TR 7/4)	板 (7.5TR 7/6)	1~2.5mmの白・灰・褐色の砂粒を多く含む	スス付着	
"	870.46	"	斜坡	斜面 ハナ	ナデ	ナデ	に付く黄鐵	(10V 7/3)	風鐵 (2.5V 7/3)	0.5~1mmの白・灰・褐色の砂粒を多く含む	スス付着	
"	870.47	"	底 部	ナデ (ていねい)	ナデ (ていねい)	ナデ	板 (7.5TR 7/6)	に付く黄鐵	1~2mmの白・褐色の砂粒を含む	赤褐色の鐵鉱石を含む		
"	870.48	"	底 部	斜面 ハナ	ナデ	ナデ	に付く黄鐵	(10V 7/4)	風鐵 (10V 7/4)	1mmの白・灰色の砂粒を少し含む	赤褐色の鐵鉱石を含む	
"	870.49	"	底 部	底 面 ナデ	ナデ	ナデ	風鐵	(10V 7/4)	風鐵 (10V 7/4)	0.5mm以下、白色地、石英を少し含む	赤褐色の鐵鉱石を含む	
"	870.50	"	底 部	ナデ	ナデ	ナデ	風鐵	(10V 7/4)	風鐵 (10V 7/4)	1mm角、白・灰色の砂粒を含む	赤褐色の鐵鉱石を含む	
"	870.51	"	斜坡	斜面 ハナ	ナデ	ナデ	風鐵	(10V 7/3)	風鐵 (2.5V 7/4)	0.5~1mmの白・灰・褐色の砂粒を含む	赤褐色の鐵鉱石を含む	
"	870.52	"	斜坡	斜面 ハナ	ナデ	ナデ	風鐵	(10V 7/4)	風鐵 (10V 7/4)	1~4mmの白・灰色の砂粒を含む	赤褐色の鐵鉱石を含む	
"	870.53	"	底 部	ナデ	ナデ	ナデ	風鐵	(10V 7/6)	風鐵 (2.5V 7/6)	0.5~1mmの白・灰・褐色の砂粒を含む	赤褐色の鐵鉱石を含む	
"	870.54	"	底 部	斜面 ハナ	ナデ	ナデ	風鐵	(10V 7/6)	風鐵 (2.5V 7/6)	0.5~1mmの白・灰・褐色の砂粒を含む	赤褐色の鐵鉱石を含む	
"	870.55	"	斜坡	斜面 ナデ	ナデ	ナデ	風鐵	(10V 7/6)	風鐵 (2.5V 7/6)	0.5~1mmの白・灰・褐色の砂粒を含む	赤褐色の鐵鉱石を含む	
"	870.56	"	斜坡	ハナ	ナデ	ナデ	風好	(10V 8/6)	灰 (5V 4/1)	0.5~4mmの白・灰・褐色の砂粒を含む	赤褐色の鐵鉱石を含む	
"	870.57	"	斜坡	斜面 ハナ	ナデ	ナデ	風鐵	(7.5TR 7/6)	灰 (7.5TR 7/6)	0.5~5mmの透明・灰白・褐色・	赤褐色の鐵鉱石を含む	
"	870.58	"	斜坡	斜面 ハナ	ナデ	ナデ	風鐵	(7.5TR 7/4)	風鐵 (7.5TR 7/4)	0.5~5mmの白・灰・褐色の砂粒を含む	赤褐色の鐵鉱石を含む	
新204号	870.59	"	斜坡	斜面 不明	ナデ	ナデ	不明	(7.5TR 8/6)	風鐵 (2.5V 7/3)	0.5~5mmの白・灰・褐色の砂粒を含む	赤褐色の鐵鉱石を含む	
"	870.60	"	斜坡	下斜面 不明 (砂礫のたね)	ナデ	ナデ	風好	(7.5TR 7/6)	風好 (7.5TR 7/6)	0.5~5mmの白・灰・褐色の砂粒を含む	赤褐色の鐵鉱石を含む	

固有番号	測定番号	器形	部位	外 面	内 面	焼成 色	外 面	内 面	調 査	土	考
第2回 第2回	870161	盃	不明(復元のため)	不明(復元のため)	や あまい	瓦 底	瓦 底	瓦 底	瓦 底	白・黒色の少 量を含む	瓦底に少量の 黒色の粉を含む 瓦底
第2回 第2回	870162	盃	~底部 口縁部 横ナメ	口縁部 横ナメ 横ナメ	ハケ	良 好	瓦 底	瓦 底	瓦 底	0.1~1mm白・黒色の少 量を含む	瓦底に少量の 黒色の粉を含む 瓦底
"	870163	"	碗	法螺形 器形下平底 横ナメ 横ナメ	口縁部 横ナメ 横ナメ	ナデ ハケ	ア	瓦 底	瓦 底	1mm程度で黒・白 色の粉を含む	斜手鉢に×印 の粉を含む
"	870164	"	口縁 ~縁下まで 横ナメ	口縁 ~縁下まで 横ナメ	ハケ	良 好	瓦 底	瓦 底	瓦 底	0.3~1.5mm白・灰・黑 色の少 量を含む	(A)型の複数 の粉を含む
"	870165	"	碗	不明	瓦 底 不明	ナデ	や あまい	瓦 底	瓦 底	1~2mm白・光沢のある黒 色の粉を含む	斜手鉢に×印 の粉を含む
"	870166	"	碗	~底部 一底部	ハケ	良 好	瓦 底 横ナメ上半部 ハケ	瓦 底	瓦 底	瓦 底	瓦底に少量の黒色・特 徴的な文字の粉を含む
"	870167	"	碗	横 部	ハケ (燒結あり)	ナデ	ア	瓦 底	瓦 底	0.1~1mm白・黒・灰色の粉を 含む	斜手鉢に×印 の粉を含む
"	870168	"	碗	横 部	ナデ	ア	瓦 底	瓦 底	瓦 底	1~2mmの黒色・灰色 の粉を含む	竹箆による洗 拭
"	870169	"	碗	~底部 一底部	ハケ (燒結あり)	ナデ	ア	瓦 底	瓦 底	0.1~1mm白・黒・灰色の少 量を含む	斜手鉢に×印 の粉を含む
"	870170	"	碗	横 部	ハケ (燒結あり)	ナデ	ア	瓦 底	瓦 底	0.1~1mm白・黒・灰色の粉を 含む	斜手鉢に×印 の粉を含む
第2回	870171	高 杯	杯 縁	ハケ	ミガキ	ミガキ	ア	瓦 底	瓦 底	0.5~1.5mm白色・銀色・黒色 の粉を含む	斜手鉢に×印 の粉を含む
"	870172	"	杯	横 部	横ナメ 横ナメ	ミガキ	ア	瓦 底 横ナメ	瓦 底 横ナメ	1mm程度、白・灰など の粉を含む	斜手鉢に×印 の粉を含む
"	870173	"	杯	縁	ミガキ (ほとんど焼結)	ミガキ	ア	瓦 底	瓦 底	1~2mm白・灰・黑色の粉を含 む	斜手鉢に×印 の粉を含む
"	870174	"	杯	底	横ナメ 横ナメ	ミガキ ハケ	ア	瓦 底	瓦 底	1mm程度、地色・黒・灰色の粉 を含む	斜手鉢に×印 の粉を含む
"	870175	"	杯	縁	横 部	横ナメ 横ナメ	ア	瓦 底 横ナメ 横ナメ	瓦 底 横ナメ	1mm程度で白・灰・褐色の粉を 含む	斜手鉢に×印 の粉を含む
"	870176	"	杯	縁	ミガキ	ミガキ	良 好	瓦 底	瓦 底	1~2mm白・灰・白色・黑色 の粉を含む	斜手鉢に×印 の粉を含む

剖面番号	試験番号	地形	部位	調査		地成		色		地		備考
				外 面	内 面	外 面	内 面	地 成	色	土		
第265回	870177	高	杯 形	漂砾 ハサウエー用 保水性 保水性	漂砾下 くがきのあとと漂ナデ 体 底 くがき	漂砾 ハサウエー用 保水性 保水性	くがきのあとと漂ナデ 体 底 くがき	良 好	塊状 (7.5W 7/6) 無底	黄 色 石漠・熱帶性などの樹林を 生長する。白い砂岩の 風化物。	風化物 (7.5W 7/6) 無底	風化物 (7.5W 7/6) 無底
"	870178	"	杯 形	漂砾 ハサウエー用 保水性	ハサウエー用 保水性	ハサウエー用 保水性	ハサウエー用 保水性	"	塊状 (7.5W 7/6) 無底	全體に風化が少ないので 風化物を含む。無色の砂粒 を含む。	風化物 (7.5W 7/6) 無底	風化物 (7.5W 7/6) 無底
"	870179	"	杯 形	漂ナデ	漂ナデ	漂ナデ	漂ナデ	"	塊状 (7.5W 7/6) 無底	白色・灰・藍色の砂粒を 含む。	風化物 (7.5W 7/6) 無底	風化物 (7.5W 7/6) 無底
"	870180	"	杯下部 杯底～輪脚部 ハサウエー用 保水性	杯 底 輪脚部 ハサウエー用 保水性	杯 底 輪脚部 ハサウエー用 保水性	杯 底 輪脚部 ハサウエー用 保水性	杯 底 輪脚部 ハサウエー用 保水性	"	塊状 (7.5W 7/6) 無底	1cmの角块、褐色・黑色の砂粒 を含む。	風化物 (7.5W 7/6) 無底	風化物 (7.5W 7/6) 無底
"	870181	"	杯下部 ～輪脚 ハサウエー用 保水性	杯 底 輪脚部 ハサウエー用 保水性	杯 底 輪脚部 ハサウエー用 保水性	杯 底 輪脚部 ハサウエー用 保水性	杯 底 輪脚部 ハサウエー用 保水性	"	塊状 (7.5W 7/6) 無底	1cmの角块、褐色・黑色の砂粒 を含む。	風化物 (7.5W 7/6) 無底	風化物 (7.5W 7/6) 無底
"	870182	"	杯底部 ～輪脚 ハサウエー用 保水性	杯 底 輪脚部 ハサウエー用 保水性	杯 底 輪脚部 ハサウエー用 保水性	杯 底 輪脚部 ハサウエー用 保水性	杯 底 輪脚部 ハサウエー用 保水性	"	塊状 (7.5W 7/6) 無底	白色・淡色砂をごく少 量含む。	風化物 (7.5W 7/6) 無底	風化物 (7.5W 7/6) 無底
"	870183	"	杯底部 ～輪脚 ハサウエー用 保水性	杯 底 輪脚部 ハサウエー用 保水性	杯 底 輪脚部 ハサウエー用 保水性	杯 底 輪脚部 ハサウエー用 保水性	杯 底 輪脚部 ハサウエー用 保水性	"	塊状 (7.5W 7/6) 無底	白色・淡色砂をごく少 量含む。	風化物 (7.5W 7/6) 無底	風化物 (7.5W 7/6) 無底
"	870184	"	杯 形	輪脚部 漂ナデ	漂ナデ	漂ナデ	漂ナデ	"	塊状 (7.5W 7/6) 無底	白色・淡色砂をごく少 量含む。	風化物 (7.5W 7/6) 無底	風化物 (7.5W 7/6) 無底
"	870185	"	排水 孔	輪脚部 漂ナデ	漂ナデ	漂ナデ	漂ナデ	"	塊状 (7.5W 7/6) 無底	白色・淡色砂をごく少 量含む。	風化物 (7.5W 7/6) 無底	風化物 (7.5W 7/6) 無底
"	870186	"	排水 孔	輪脚部 輪脚部 漂ナデ	輪脚部 輪脚部 漂ナデ	輪脚部 輪脚部 漂ナデ	輪脚部 輪脚部 漂ナデ	"	塊状 (7.5W 7/6) 無底	白色・淡色砂をごく少 量含む。	風化物 (7.5W 7/6) 無底	風化物 (7.5W 7/6) 無底
"	870187	"	排水 孔	輪脚部 輪脚部 漂ナデ	輪脚部 輪脚部 漂ナデ	輪脚部 輪脚部 漂ナデ	輪脚部 輪脚部 漂ナデ	"	塊状 (7.5W 7/6) 無底	白色・淡色砂をごく少 量含む。	風化物 (7.5W 7/6) 無底	風化物 (7.5W 7/6) 無底
"	870188	"	管 台	口輪脚 輪脚部 漂ナデ	輪脚部 輪脚部 漂ナデ	輪脚部 輪脚部 漂ナデ	輪脚部 輪脚部 漂ナデ	"	塊状 (7.5W 7/6) 無底	2cmの白・灰・褐色の砂粒を含む。	風化物 (7.5W 7/6) 無底	風化物 (7.5W 7/6) 無底
"	870189	"	口輪脚	輪 部 2段式輪 脚 ナデ	輪 部 2段式輪 脚 ナデ	輪 部 2段式輪 脚 ナデ	輪 部 2段式輪 脚 ナデ	"	塊状 (7.5W 7/6) 無底	白色・淡色砂を含む。	風化物 (7.5W 7/6) 無底	風化物 (7.5W 7/6) 無底
"	870190	"	口輪脚 ～輪脚 ハサウエー用 保水性	輪脚部 輪脚部 漂ナデ	輪脚部 輪脚部 漂ナデ	輪脚部 輪脚部 漂ナデ	輪脚部 輪脚部 漂ナデ	"	塊状 (7.5W 7/6) 無底	2cmの白・淡色砂を含む。	風化物 (7.5W 7/6) 無底	風化物 (7.5W 7/6) 無底
第27回	870191	"	口輪脚	輪 部 漂ナデ	輪 部 漂ナデ	輪 部 漂ナデ	輪 部 漂ナデ	"	塊状 (7.5W 7/6) 無底	2cmの白・淡色砂を含む。	風化物 (7.5W 7/6) 無底	風化物 (7.5W 7/6) 無底
"	870192	"	口輪脚	漂ナデ	漂ナデ	漂ナデ	漂ナデ	"	塊状 (7.5W 7/6) 無底	2cmの白・淡色砂を含む。	風化物 (7.5W 7/6) 無底	風化物 (7.5W 7/6) 無底

図面 番号	地物名 記号	習形	部位	外観		内観		構成	色	層	地 土	備 考
				前	後	左	右					
第27回	870209	林	底部	ナデ	(ハケー断枝)	ナ	デ	風好	塊状體 (101.8/4)	塊	(7.3W 7/6)	2段階の灰褐色・褐色・黑色の 岩英層
"	870210	"	底部	刺立木のナデ	"	"	"	にひき	塊状體 (17.5W 7/4)	灰	(51.1W 1/1)	2段階の黒・灰の岩英層 岩英層で黒・灰の岩英層 岩英層で黒・灰の岩英層を有し る。
"	870211	"	底部	ナデ	"	ナ	デ	風好	塊状體 (17.5W 8/4)	塊	(101.8/4)	1~3段階の灰褐色・褐色
"	870212	コアブ	先端	ミガキ	不明	"	"	塊状體	(7.3W 5/4)	塊	(7.3W 5/4)	褐色化地盤含む 石英・角閃石・灰岩・褐色・白色 の岩英層を含む。
"	870213	土	天井場	天井場 ナデ	"	ナ	デ	風好	塊状體 (15W 7/6)	塊	(51W 7/6)	0.5~1mmの石・石英・角閃石等 か、灰色・黑色の岩英
"	870214	構	先端	ていねいな ナデ	持あさえ	"	"	塊状體	(101.8/4)	塊	(101.8/4)	石英・角閃石の網目と0.5~1mm の褐色の岩英を含む。



遺跡遠景（昭和42年当時）



遺跡から東を望む



遺跡近景（昭和42年當時）



発掘風景



住居跡遺物出土狀況



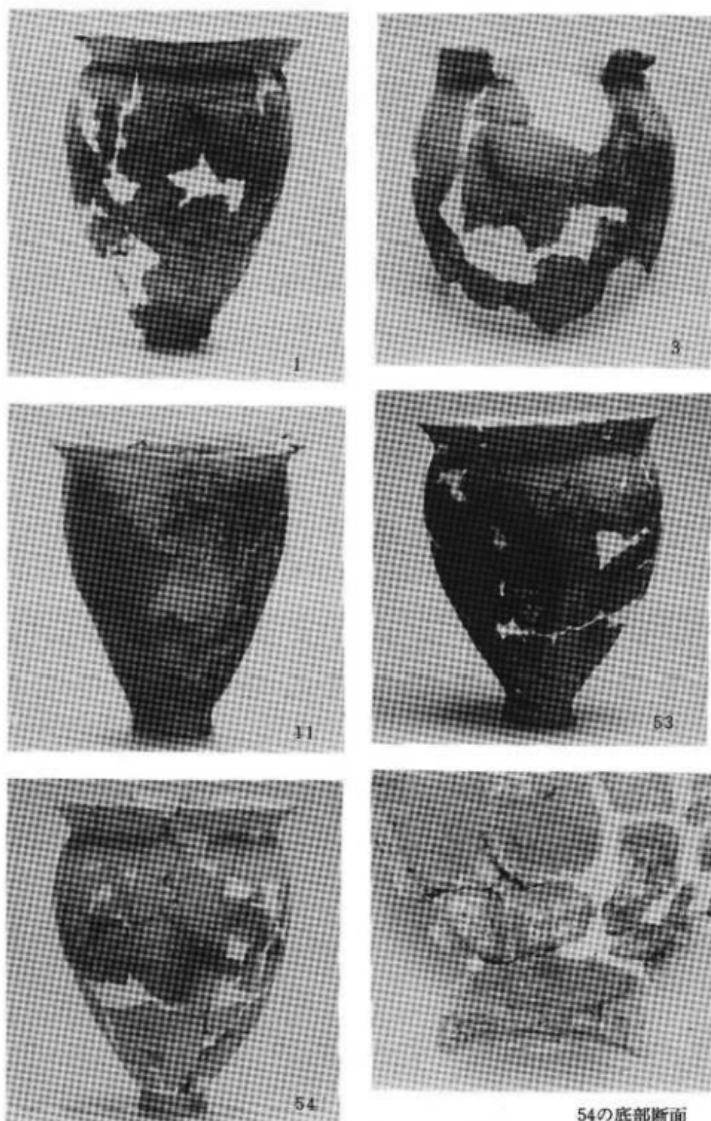
遺物出土狀況



遠景（現在）東より

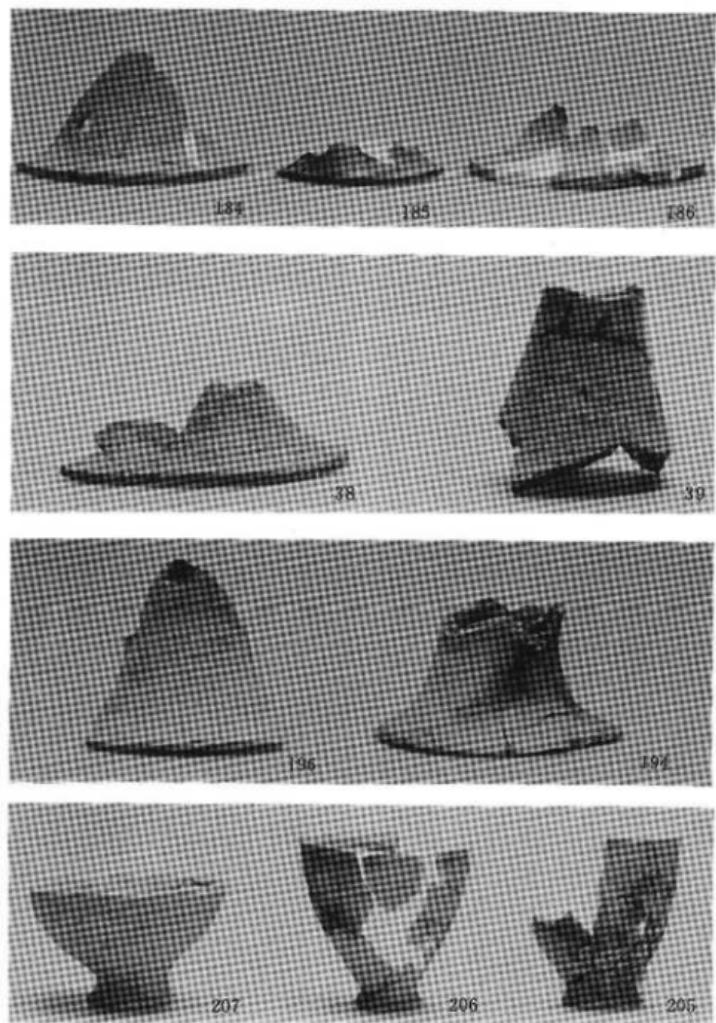


近景（現在）北より

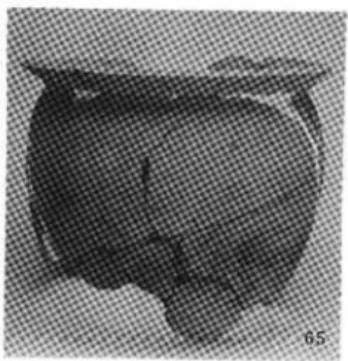
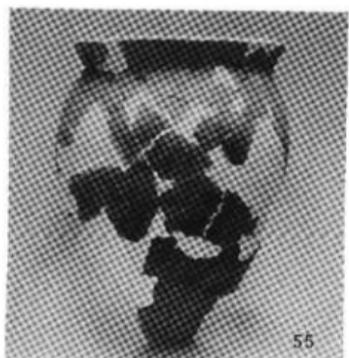


出土遺物(1)

54の底部断面



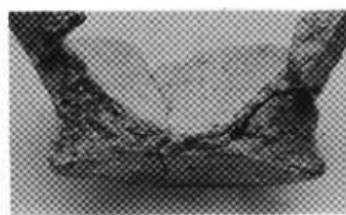
出土遺物(2)



出土遺物(3)



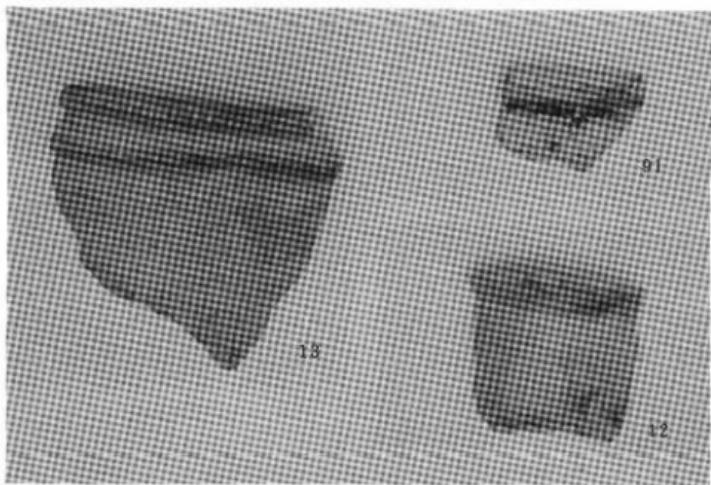
出土遺物(4)



出土遺物(5)

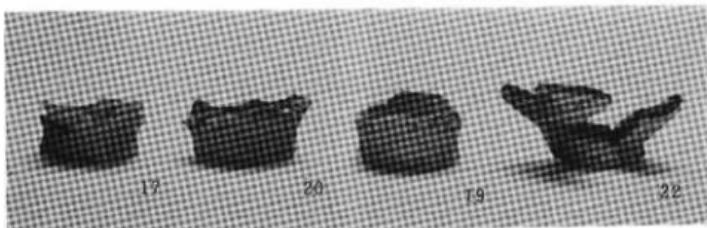
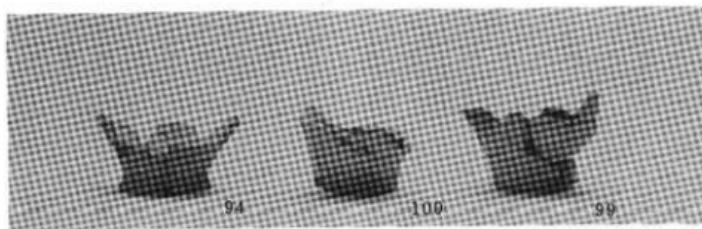


中溝タイプの甕

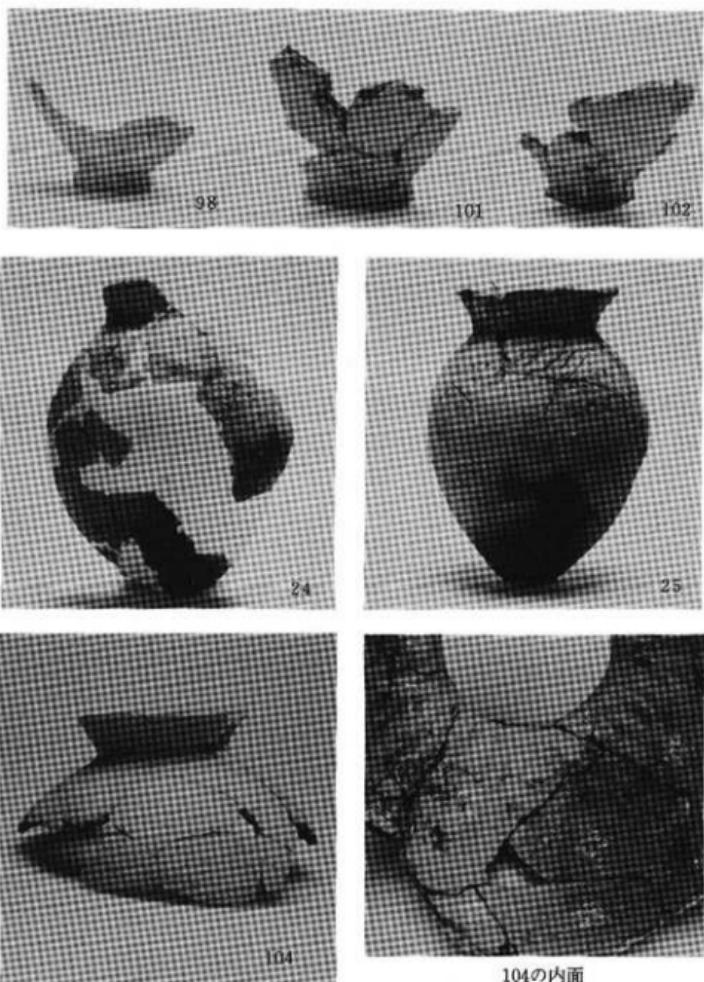


刻み目をもつ甕

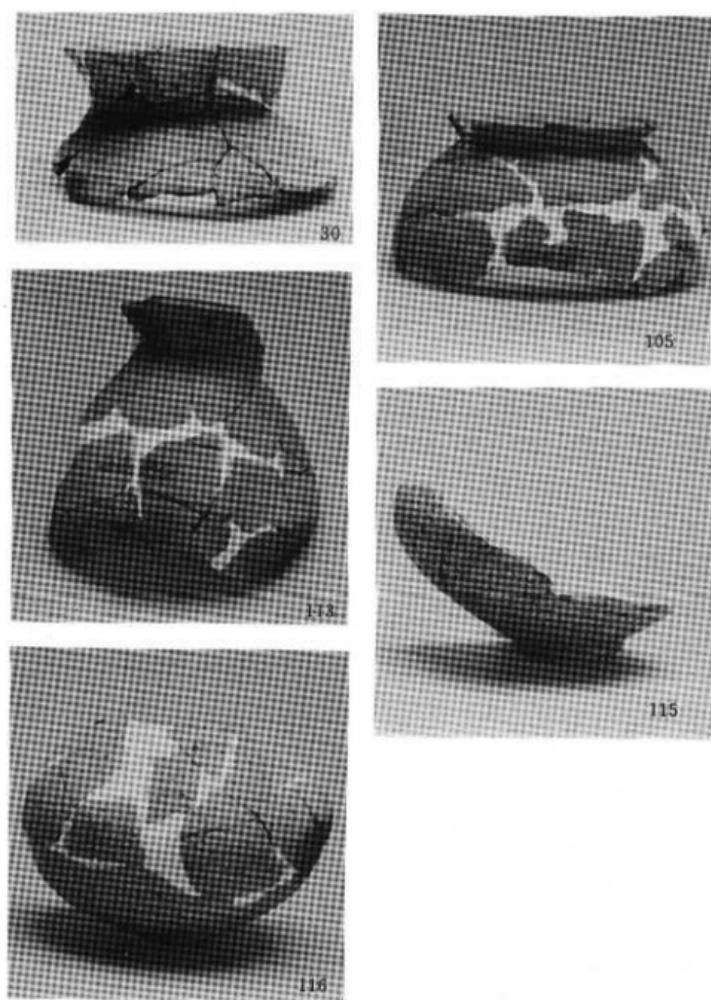
出土遺物(6)



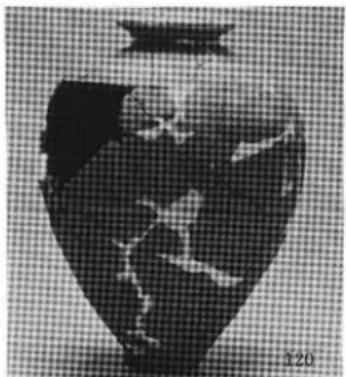
出土遺物(7)



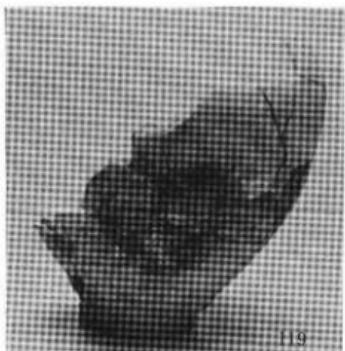
出土遺物(8)



出土遺物(9)



120



119



119の底部断面

左上 120の胸部下半

左 120の内面



出土遺物(10)



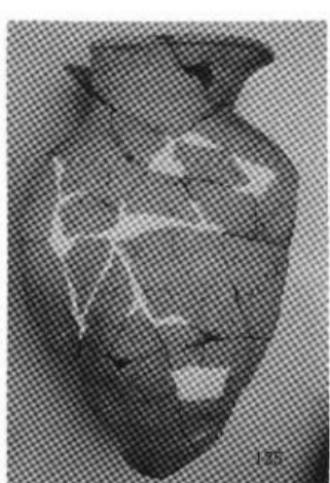
122



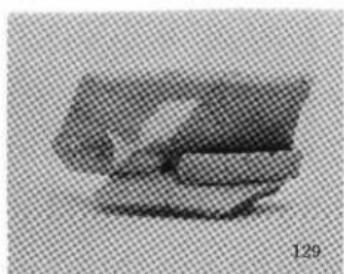
123



124



125



129

出土遺物(1)



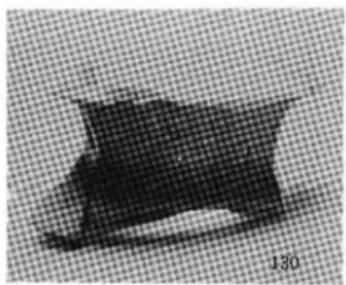
127



133



136



130



140



137

出土遺物(12)



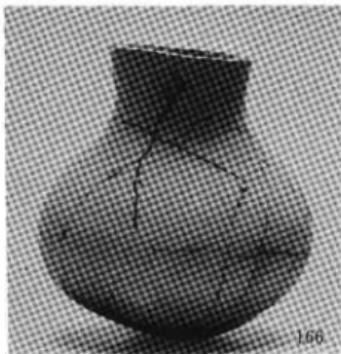
163



162



162

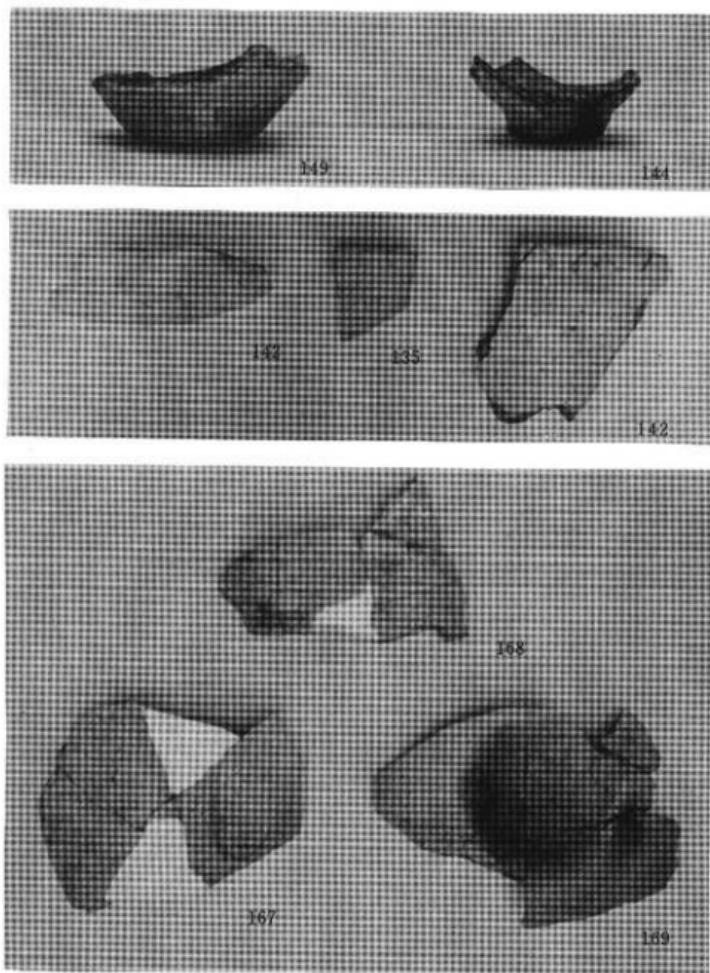


166



166の底部

出土遺物(13)



線刻文土器

出土遺物(14)



155



156



159



157



152

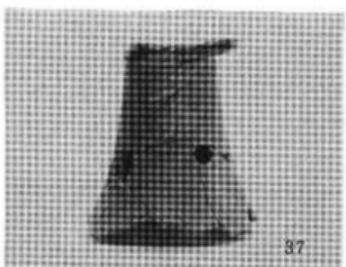


158

出土遺物(19)



36



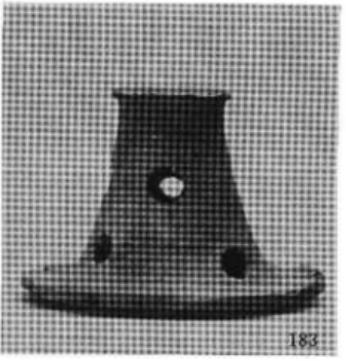
37



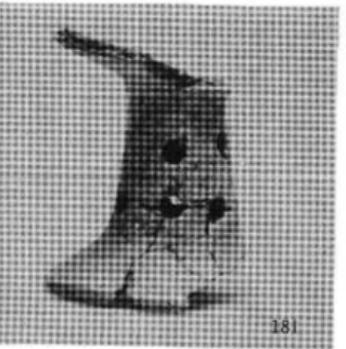
180



177



183



181



181の杯部と脚部の接合面
出土遺物(16)



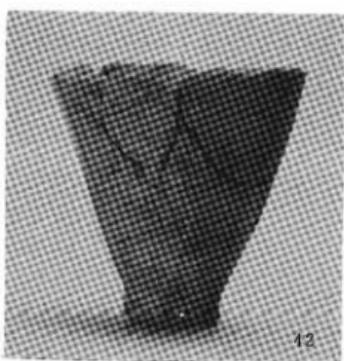
47



197



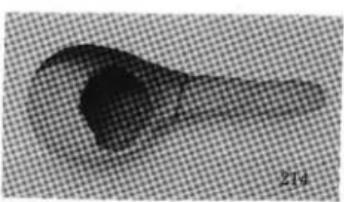
212



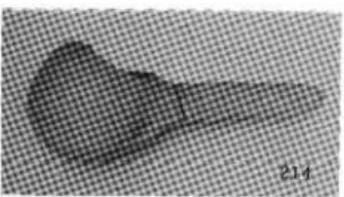
42



213

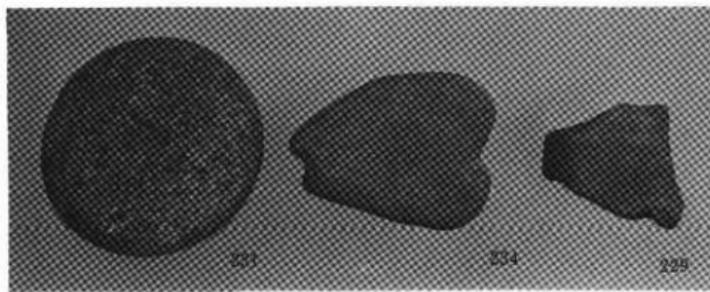
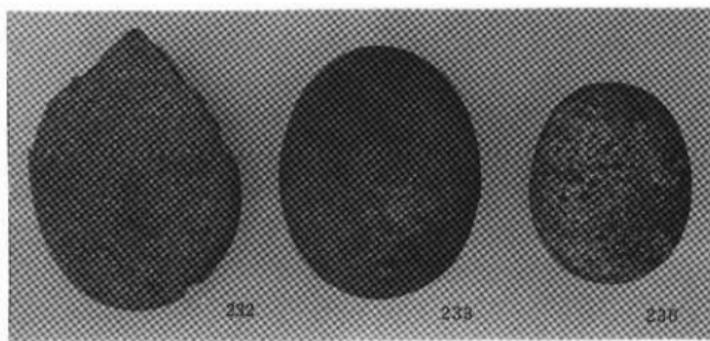
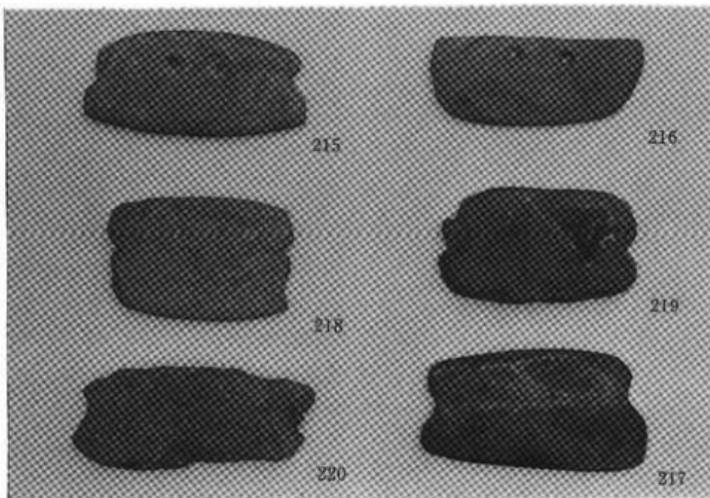


214



214

出土遺物(7)



出土遺物 18